

会報  
第85号



一般社団法人 函館文化会

〒042-0955 函館市高丘町51番1号  
学校法人野又学園 函館大学内  
電話・Fax (0138) 57-1175  
E-mail bunkakai@host.or.jp  
URL http://hakodate-bunkakai.com/

### 令和4年「神山茂賞」贈呈式・祝賀会

令和4年神山茂賞贈呈式



受賞者ご夫妻



受賞者を囲み関係者での記念撮影



祝賀ステージはLa pla Duoのお二人

(写真撮影: アランチャータ(株)坂本奈都子)

令和4年「神山茂賞」は、木村裕俊氏に神山茂賞を、また、新城光正氏に神山茂奨励賞を贈呈、贈呈式・祝賀会を来賓、関係者及び会員が集い函館国際ホテルで開催しました。

贈呈式後、お二人の受賞者による記念講演、引き続いての祝賀会はLa pla Duoのフルート演奏による祝賀ステージで始まり、途中、受賞者へのお祝いのスピーチもあって、華やかに和やかな雰囲気の中、祝賀会となりました。(贈呈式、記念講演の内容は4ページ)

### 函館文化会 会報「巴響」 第85号 目次

令和4年「神山茂賞」贈呈式・祝賀会.....	1	第11回「昔の亀田 古写真で探訪」	
令和5年度定時総会を開催.....	2	NPO箱館写真の会会員	山田 雄一.....20
～令和4年度事業報告・決算報告を承認～		卓話 第18回	
函館文化会「ホームページ」「ブログ」開設しています...	2	開国の先駆者『榎本武揚の点描』	根津 静江.....23
会長挨拶		特集 郷土の歴史・文化を語り継ぐ⑧	
函館の暑い夏を乗り越えて 平原 康宏.....	3	～テーマ「亀田」～	
函館文化会役員名簿(令和4年度定時総会選任).....	3	亀田合併50年を迎えて	近江 茂樹.....26
令和2年神山茂賞 ～「神山茂賞」を木村裕俊氏に		亀田中学校の思い出	田島 郁夫.....28
「神山茂奨励賞」を新城光正氏に贈呈～	4	わが街 亀田・神山	木村 一雄.....29
受賞記念講演・お祝いのスピーチ		「亀田地区」は縄文時代遺跡群の宝庫	田原 良信.....31
『箱館戦争 新・戦没者名簿』について 木村 裕俊.....	5	Oh! My Sweet Road 産業道路	木村 拓美.....32
お祝いのスピーチ 大谷 仁秀、根本 直樹.....	7	赤川 むかし語り	山田 雄一.....34
造船現場から見た「港はこだて史」の世界 新城 光正.....	8	原稿募集・次回テーマは「湯の川界限」.....	36
お祝いのスピーチ 里見 泰彦、恩田 昭二.....	10	令和5年神山茂賞は、中尾仁彦さんに.....	36
函館文化会 会員募集及び助成制度.....	10	特別寄稿	
令和4年度函館文化会講演会		函館に現存する三つの「常磐」 古野柳太郎.....	37
日本最初の気象観測所・函館		函館文化会への図書等の寄贈.....	38
函館地方気象台長 橋本 勲.....	11	会務報告	
市民公開講座		令和4年度事業報告.....	39
第10回 函館の街並みと景観と大火		令和4年度収支決算.....	41
(株)建設企画山内事務所代表取締役 山内 一男.....	15	函館文化会会員名簿 (R5. 11. 01現在).....	42
大火に学ぶ函館の街づくり		編集後記.....	42
函館市消防本部予防課長 花巻 英典.....	17		

## 令和5年度定時総会を開催 ～ 事業報告・決算を承認～

一般社団法人函館文化会では、令和5年度定時総会を5月29日（月）午後1時30分からフォーポイントバイシェラトン函館において、会員総数155名のうち会員125名（委任状出席を含む）が出席し開催いたしました。

新型コロナウイルスの感染状況が多少落ち着いた状況にはありましたが、これまでと同様に出席者の健康と安全を考慮しながら開催、提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承し、無事終了いたしました。

以下、定時総会の内容について、その概要をお知らせいたします。

定時総会は、平原康宏会長からの挨拶後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。

今定時総会に付議された議案・報告は

- 議案第1 令和4年度事業報告について
- 議案第2 令和4年度収支決算及び監査報告について
- 報告第1 令和4年度収支補正予算について
- 報告第2 令和5年度事業計画について
- 報告第3 令和5年度収支予算について
- 報告第4 「講演会」の開催について

の6件で、議案第1、議案第2及び報告第1は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から5月19

日実施した監査について「収支決算については、収入・支出ともに適正に執行されており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていたと認める」との監査結果の報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された令和4年度事業報告・収支決算については、別掲（39ページ）のとおりです。

また、3月27日開催の令和4年度第5回理事会で議決した令和5年度事業計画・収支予算について、報告第2及び報告第3として一括説明があり、いずれも満場一致で了承されました。新年度の事業の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には多くの会員に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、また、「函館文化会講演会」は、10月14日（土）函館市中央図書館で、函館大学教授中村 和之氏を講師に「アイヌ文化と函館」を演題に開催予定、さらに「郷土の歴史・文化等を学び・探求しながら、受け継がれてきた“郷土の歴史と文化”を後世に継承する」ことを目的として開催している「市民公開講座」も様々なジャンルの方を講師に迎え、継続して実施することが報告されました。



### 函館文化会「ホームページ」、「ブログ」の開設

インターネットの普及により、企業・団体等がホームページを持っていることが当たり前になっており、「函館文化会」に対する信頼度を向上していくには、会員を含めたユーザーの求める情報を常に発信していくことが必要です。

こうした中で「函館文化会」の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設しております。一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。

アドレスは、次のとおりです。

- ・ホームページ <http://hakodate-bunkakai.com/>
- ・ブログ <http://blog.livedoor.jp/bunkakai/>

（メンテナンスのため、更新が滞っております。暫くお待ち下さい。）



## 会長挨拶

## 函館の暑い夏を乗り越えて



一般社団法人 函館文化会 会長 平原康宏

10月の声を聴いて、ようやく秋らしい季節となり10月18日には昨年より18日も早く「横津岳に初冠雪」の報道があり、着実に冬への歩みが進んでいる。

それにしても今年の夏の猛暑には驚かされた。函館に長く住んでいるが体験したことのない暑く長い夏だった。それもそのはずで、明治5年（1872）函館で日本最初の気象観測が始まって151年の観測記録が残る気象台の歴史の中で、8月10日には観測史上1位となる最高気温が35.4℃の「猛暑日」を記録、また、最高気温30℃以上となる「真夏日」が26日と過去最多の18日を大きく更新した。今年の暑さは「これまで経験したことのない」異常気象といわれたが、この先もこれが日常の気象現象として起きる可能性があるのではないかともいわれている。

このように今年の函館は暑く長い夏だったが、逆に寒い夏を思い出させてくれた。昭和63年（1988）の夏、函館と青森を結ぶ青函トンネルの開通を記念しての博覧会（青函博）が行われ、当時博覧会を担当したこともあり今でも鮮明に覚えているが、72日間の期間中低温が続き期間の半分以上が雨という夏とは思えないそれこそ異常気象で、会場では期待していたビールよりもホットコーヒーやホットミルク、豚汁など温かいものが飛ぶように売っていたことを思い出す。

改めて当時の気象を調べてみようと呼館気象台を訪ねてきた。突然の訪問にもかかわらず親切に対応していただき、詳しいデータもいただくことができた。今年、令和5年（2023）と博覧会が開催された昭和63年（1988）の8月の気温を並べてみると、8月に30℃の「真夏日」を超えた日は今年が24日で、昭和63年はわずかに2日、平均気温は今年が26.5℃、昭和63年が21.9℃だった。平年の8月の平均気温が22.1℃なので、今年の夏はいかに暑かったか、また、青函博が開催された昭和63年はいかに寒い夏だったかこの気温が示している。天気を言い訳にするつもりはないが、入場者は予定を下回り、結果として赤字を計上する博覧会となり、イベントの開催は天候に恵まれるか否かが重要であることが良く分かる。

函館文化会事業を悩まさし続ける新型コロナウイルス感染症、会員皆様には不安と不便な状況の中でも多くのご参加をいただきながら開催することが出来ました。この春に法的位置付が「5類」に移行し、行動制限の伴わない日常生活に戻り人々の動きも落ち着きを取り戻しつつありますが、事業の開催に当たってはこれまで同様に出席者の健康と安全に考慮しながら、函館文化会の取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」をテーマに各種事業を続けて参ります。会員皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

## 一般社団法人 函館文化会 役員名簿

(令和4年5月27日選任)

○会長	平原康宏	○理事	佐々木 茂	○理事	山本真也
○副会長	繪面和子		佐藤育子		若山直
	櫻井健治		須藤由司	○監事	佐々木俊克
○常務理事	上田昌昭		中野晋		山田涼子
○理事	五百川忠		藤井方雄	○顧問	池見厚一
	小笠原孝		藤井良江		金山正智

# 令和4年 神山茂賞

「神山茂賞」を木村裕俊氏に

「神山茂奨励賞」を新城光正氏に贈呈

函館文化会では、令和4年「神山茂賞」に郷土史研究者 木村裕俊氏に、「神山茂奨励賞」に元造船技術者 新城光正氏にそれぞれ贈呈しました。

贈呈式は、受賞されたお二人の関係者の皆様をはじめ、ご来賓やこれまでの受賞者、函館文化会会員など73人が出席して、故神山茂氏の命日に当たる11月7日（月）函館国際ホテルにおいて行いました。

木村裕俊氏は、榎本武揚と神山茂が著した箱館戦争の戦没者名簿を比較調査し、自費で「箱館戦争 新・戦没者名簿」を出版するなど、平成25年に「神山茂奨励賞」を受賞した以降も継続して地道な努力・活動

を続けられてきたことが評価されました。また、新城光正氏は、42年間造船技術者として勤務され、数多くの船舶設計を手掛けられる傍ら、船舶の資料や街の移り変わる状況を捉えた資料を現場の専門家の立場から丹念に蒐集し纏め上げ、その成果は後進の研究にも資するものであると評価されました。

贈呈式では、函館文化会会長 平原康宏から「お二人のこれまでの活動は郷土の歴史の探究と継承にとって貴重なもので、郷土文化の振興に貢献している。今後も更なる活躍を期待している」と讃え、その後、神山茂賞選考委員会委員長佐々木馨氏による審査経過報告、函館市教育委員会教育長 辻 俊行氏からの祝辞があり、受賞されたお二人を代表して木村氏から「これまでの活動を応援し、励まし続けてくれた友人や知人、そして家族、こうした周囲の人達の力添えがあってこそこの光栄である」との謝辞がありました。



神山茂賞・木村氏



神山茂賞・新庄氏

贈呈式の後、木村裕俊氏による「箱館戦争 新・戦没者名簿について」、また、新城光正氏は「造船現場から見た『港はこだて史』の世界」と題しての記念講演が行われました。

受賞者を囲んでの祝賀会は、祝賀ステージで「フルートアンサンブルLa pla Duo」による演奏で始まり、お祝いのメッセージや出席された既受賞者の方々の紹介もあって、華やかな中にも和やかな雰囲気の中で盛会裡に終了いたしました。

なお、木村氏と新城氏お二人の受賞記念講演の内容を講演録で概要をご紹介します。

「神山茂賞」受賞記念講演（令和4年11月7日）

## 『箱館戦争 新・戦没者名簿』について

木村裕俊



この度の「神山茂賞」受賞は私にとっては光栄の極みで、函館文化会様はじめ関係者の皆様から御礼を申し上げます。受賞の感慨に浸りながら、お話をさせていただきます。

はじめに、これまで発刊された箱館戦争における戦没者名簿については、著名なもので2冊あります。1冊は、榎本武揚が著わした『明治辰己之役東軍戦没者過去帳（以下「榎本過去帳」）』であり、もう1冊は神山茂先生の著作である『箱館戦争（戊辰己巳役）幕軍陣歿者氏名考（以下「神山名簿」）』です。

この2冊はこれまで比較検討されることはありませんでした。それは榎本過去帳は「位階順」で、神山名簿は「50音順」で整理されており非常に比較しにくいものだったからだと思います。そこで、今回はこれらをパソコンのエクセルソフトを使って比較検討し、何がどう違っているのか調べてみました。

「箱館戦争」の概要は、本日までご出席の皆様は良くご存じのことと思いますので省略させていただきます。

### 戦争参加者（兵士）の構成

榎本軍の「戦争参加者（兵士）」の構成ですが、戊辰戦争以来、榎本武揚の許に集まって来た旧幕府関係の戦闘部隊が主なもので、例えば新選組、彰義隊、遊撃隊など17の部隊が参加していますが、人員管理等は各部隊が個別に行っていたようです。全体の概略人数は、凡そ3,000名と云われていますが、詳細人数は分かっています。

せん。神山茂氏でさえ、「榎本軍の総員が何人であったのか、明らかになっていない」と、後に出て来る名簿著書の中で嘆いていました。

これに対し新政府軍は明治元年（1868）の「戊辰之役」の戦いに加わった各藩と箱館府の勢力は1,430人で、新政府は各藩に対し出兵要請をし、届出書類により参加者を提出させ、戦い終了後には報告書とともに死傷者名簿も出させていたので信頼性が高いと思われます。

その名簿によると、箱館府200名、松前藩170名、峠下在住隊70名、弘前藩120名、越前大野藩170名、備後福山藩700名で、これは榎本軍の大凡半分なので、この年の戦いは榎本軍が優勢であったらうと思います。

明治2年（1869）の「己巳之役」の戦いでは新政府軍は、前年の敗北を反省し榎本軍の2.7倍となる約8,000名を投入、その結果、どの戦局でも有利に戦いを進めることが出来ました。各藩から新たな兵力を備えた戦力は、箱館府200名、松前藩1,684名、弘前藩2,207名、備前岡山藩541名、備後福山藩632名、長州藩781名など合計8,108名（明治2年乙部上陸時）

### 榎本軍の戦没者名簿

榎本武揚が明治40年に著わしたといわれる『明治辰己之役東軍戦没者過去帳』ですが、この榎本過去帳が出来る前に恐らく明治の初め頃にはその「原簿」となる過去帳があったと思われます。このため、明治40年（1907）に作られたものは改訂版であろうと思っています。これは、明治25年（1892）に土方歳三の消息に関する書簡に『辰巳戦死者之名簿』として登場しています。

このため、明治40年より前に既に名簿があったことが判ります。また、明治25年に名簿が作られるタイミングがないことから、明治の初め、もしくは碧血碑が作られた明治8年（1875）の頃には既にあったのではないかと思います。そして、この名簿は2部制になっていて、第一部が「箱館之役戦没者霊位 538名の名簿で、第二部が「奥羽之役戦没者霊位 278名の名簿で、二つ合わせて

「816名分の名簿」になっております。

もう一冊が、昭和34年（1959）に神山茂先生が著わした『箱館戦争（戊辰己巳）幕軍陣歿者氏名考』で、この二冊の名簿の「戦没者数」の違いは、「榎本過去帳」は直接の戦いで戦死した人だけをカウントし、「神山名簿」は、それ以外にも補強して負傷後の死亡、捕縛後の処刑者、戦地での病死者なども含めて計上しており「榎本過去帳より120名程多くなっております。

今回の『新・戦没者名簿』は、「神山名簿」の範囲まで広げており、名簿別総括表を次に示します。

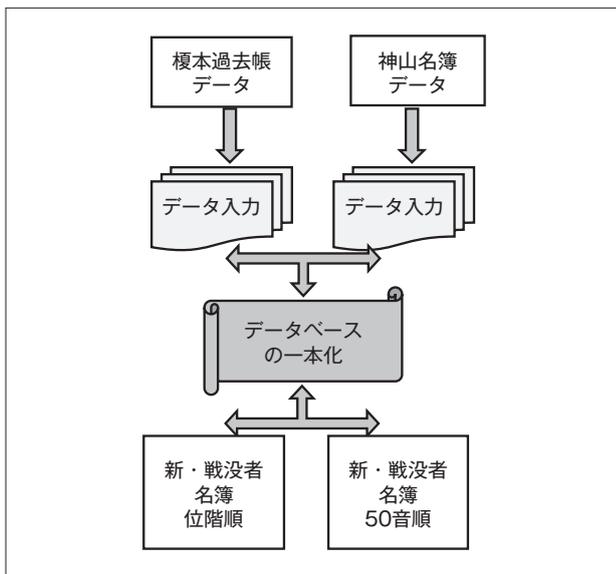
### 名簿別総括表

各種名簿	士分の者	兵卒の者	合計
榎本過去帳	366名	172名	538名
神山名簿	465名	194名	659名
新・戦没者名簿	467名	200名	667名

### 『新・戦没者名簿』作成の手順

新しい戦没者名簿を作るにあたっては、位階順からも五十音順からもどちらからも自由に引ける、また、どんな引き方をしても同じ情報が出てくるようにしたい、という考えを元に行いました。参考までにフロー・チャートを以下に示します。

### 新名簿作成のフロー・チャート



初めに、「榎本過去帳」のデータ538人分をエクセルソフトに入力し、同様に「神山名簿」のデータ659人分も入力し、合わせて1197人分のデータのソフトを一本化してアウトプットすると、同じ整理番号で同じ名前の人が2人ずつ出てくるので、これを一人に合わせてまとめた。



木村裕俊氏事績

この二冊の名簿のデータを一本化した後もなお、同姓同名やよく似た名前など、同一人がいないか確認し、「同一人」がいた場合にはまとめ、同一人と認められない場合はそのままにしておく。同じ整理番号に二人以上入っている場合がありますので、その場合は調整することが必要となります。

こうしてまとめたものから、特徴的な傾向を調べますと次のようなことが分かります。

一点目は、「殉難地」です。「榎本過去帳」、「神山名簿」の二冊に各々記載がありますが、全調査個数667名中261名分が合いませんでした。全体の40%が不一致、不記載であったため、両方併記の措置としました。

二点目は、脱走者・不明者の推定です。まず榎本軍の全体人数は推定値であり、いなくなった人数も推定でしかなく、全体人数3,500名（明治2年500名増）に対し943名と全体の1/3とかなり多くの人数となりました。その理由としては、明治2年の戦いで、五稜郭に新政府軍の軍艦「甲鉄」からの艦砲射撃が命中し大勢の兵士が逃げ出したと云われていることや、戦闘中に亡くなくても気付かれなかった人が大勢いたことがあったものと考えられます。

三点目は、捕縛者についての記載です。「榎本過去帳」には記載がありませんが、「神山名簿」に記載されており、箱館で9名、江差で2名、江良と神山で各1名、合計13名でした。箱館の場合、処刑時期は明治2年11月、場所は大森浜で斬首刑でした。埋葬は「亀田無縁寺」、別名「七重浜閻魔堂」とも呼ばれるところで、無縁仏や罪人を葬る所でもあったそうです。また、関係図書には、兵士

以外の応援者も捕縛され、処刑された記録もあり、もっと多くの人が犠牲になった可能性があります。

### むすび

私自身の全体的な感想としては、榎本軍の資料は誤りや抜け落ちが多く、神山茂氏も指摘していますが資料同士のくい違い、不確かさ、曖昧さなどがあって、今後は資料の精度を上げていく必要性を感じました。榎本武揚

が明治40年に改訂したのもそうしたことに気付いて作り直そうとしたのかもしれませんが。翌41年、榎本は75歳で不帰の旅へと旅立ちました。

以上、雑駁な話題ではありましたが、「榎本過去帳」と「神山名簿」の比較検討と解析がそれぞれの名簿の補強の一助となればとの思いでございます。ありがとうございました。

## 木村裕俊氏へのお祝いスピーチ



北海道東照宮宮司

大谷仁秀様



博物館友の会会員

根本直樹様

紹介に預かりました碧血会会長を務めさせていただいております北海道東照宮宮司大谷でございます。推薦者として、木村さんを選定下さった神山茂賞選考委員会の皆様、また、このように華やかな祝賀会を開催していただいた函館文化会の皆様に御礼申し上げます。

木村さんは、従前より、ライフワークとして北海道史を研究しておられましたが、鉄道運輸機構を定年退職されたあと一念発起され、奈良大学文学部（通信教育）に入り文化財や日本史を学ばれ学芸員資格を取得された後、いくつもの研究成果を発表され、特に、「新羅之記録」の現代語訳で神山茂奨励賞を受賞され、これを糧にさらなる研鑽を続けてこられました。

また、長年取り組んでこられた箱館戦争研究の総決算ともなる「箱館戦争 新・戦没者名簿」を、令和4年度の碧血碑前祭に合わせ出版されました。これは、箱館戦争研究者にとって大変ありがたい一次資料本であります。毎年6月に執り行われる碧血碑前祭は、木村さんの多大なる尽力で円滑に開催されて参りました。

この度の神山賞の受賞は、木村さんの終着点ではないと思います。今後も益々の研究に取り組み、函館及び道南の歴史に新たなる光を当ててくださることを大いに期待しております。

木村さん、神山茂賞受賞おめでとうございます。

「神山茂賞」受賞誠におめでとうございます。博物館友の会を代表してお祝いを申し上げますとともに、この場に同席できることを嬉しく思います。

過日、木村様の自宅にお伺いし、印象に残ったのは、この受賞に対し「本当に嬉しい」という言葉と笑顔でした。その言葉の内実は、退職後の研究の評価を得たことであり、実績を「褒められた」ことの実感でした。改めてこの賞の意味を感じさせられました。

木村様は博物館友の会の活動では、旅行会の事前企画・当日のコーディネート・事後の旅行記全般を担当され、会員を楽しませてくれる人物です。今回の受賞で私個人が強く感じたことは、退職後に好きだった歴史を大学で学ばれ、学芸員という資格も取られた熱意です。以前に博物館で実際に展示解説をされ、すごく楽しかったと笑顔で話してくださいました。つまり、「市民学芸員」を具現化しているのです。

ある本にこれからのミュージアムは「様々なステークホルダー（多様な人々）が関与していること」と書かれていて、さらに日本学術会議では「シチズンサイエンス」という市民による科学的活動を提言しており、木村様はこれらの現代的な動きを実践している方です。

今後もお体に留意され益々の研究をなされることを祈念してお祝いの言葉といたします。

「神山茂賞」受賞記念講演（令和4年11月7日）

## 造船現場から見た「港はこだて史」の世界

新城 光 正



この度の「神山茂奨励賞」受賞、光栄の極みです。この賞を励みにこれからも郷土の歴史・文化の掘り起こしを続けていく決意を新たにしているところです。

私は、函館山の麓、母の実家の元町で生まれ弥生町（旧旅籠町）で育ち、港を行き来する連絡船、集結する鮭鱒母船、煙突周りにやぐらを組みこんだカニ母船を坂から見下ろしながらの日々の生活でした。当時を振り返ると

### 昭和20年「函館空襲」

3歳の私には記憶がないが7月14日、15日と米軍のグラマンの飛来、祖母に背負われ弥生坂を昇り、樹木が生い茂げり空が見えない林に蚊帳を張り布団を敷いて避難したそうだ。

爆弾投下により400戸が焼けだされ、死者37人の被害があった。焼け跡は永らく放置され、すぐには修復されない悲惨な情景が続き、それを見た記憶が今でも脳裏に残っております。

### 昭和23年～昭和30年「イカの街函館が最も生活と結びついた時代」

西部地区でも大町から西側弁天方面は庶民の街（下町）、大町から東側の末広町、十字街は上町として形成されていました。常盤坂の船見町に税務署の官舎、姿見坂の船見町にドックの社宅があり、ドックや西浜岸壁にある本間鉄工所や旋盤など扱う町工場が多数あり。また、

当時の大黒町は買い物客での賑わい、夜店の混雑は凄まじかったものです。

イカ釣り船（当時はイカつけ）は、函館地区240隻、本州からの釣り船220隻が入船漁港を中心に碇泊、本州船の番屋が200件、釣り子2,000人が入船町付近を中心に居住し、当時は配給制でお米は内地米7日分、道産米7日支給の札が掲げていたものです。食べ物不自由な中、イカは豊漁で昭和25年からは獲れすぎて加工が追い付かず値段が暴落「大漁貧乏」が続き、昭和30年までこの状態が続いていました。店頭でイカは10円で15～20ばいで売られており、イカ干場を建設、近所の家々の主婦もイカさきのアルバイトに駆り出され、一つのイカ籠（40kgほど、200ばいくらい）を何籠も処理しスルメイカ加工をしていたものです。これをヤミ米や食料品と交換し、生活の一部としていました。

最大の問題点は、雨が降りあめたイカの悪臭が街中に拡がり、日産化学の飼料作りの悪臭と重なり街中臭くて臭くて！まさに「イカの街はこだて」の原風景でした。幸いにも昭和27年から北洋漁業が再開され、その後イカの価格は安定していきました。

### 昭和27年～昭和63年「北洋漁業基地としての函館」

4月になると巴港の岸壁には北洋に向かう独航船が連なり、港内には隙間なく係留する母船で埋め尽くされておりました。そして、街には北洋漁業歓迎のステッカーが貼られ、頭にねじり鉢巻きのヤン衆があちらこちらと闊歩していました。雨上がりの街にはイカの悪臭が漂い、造船所のリベットを叩く音、接岸する連絡船の霧笛、始・終業時のドックのサイレンの音、これらが西部の街に鳴り響き、こうした港の周辺の姿が永らく続いたものです。高校を卒業後、就職したのが「函館どつく」で、船造りの職務を42年と半年、多数の船を手がけ世に送りだしてきました。この生まれ育まれてきた函館に感謝を込めて、“船造り人生”の足跡を省みながら「港はこだ

て史」と題して纏めてみました。

「港はこだて史」は、1《戦前・戦中編》、2《戦後編1969年以前》、3《戦後編1970年以降》、4《別冊の年表》の4分冊で、写真や表を多く取り入れました。本書には、従来の研究には盲点となっていた、例えば、造船現場の建造写真、労働者の祭典メーデー、生活の維持向上のための春闘、こうした生活に密着した生の写真をも掲載して、まさに本書は造船現場から見た通史的な「港はこだて史」といえるものです。

コロナ禍で生活様式が一変した日々が続き、3年が過ぎた今も、入港するはずのクルーズ船も観光客も途絶えた冷え切った街函館となっています。

しかし、歴史を紐解けば天然痘やペストなどの感染症があり、函館においても明治19年のコレラの発生で不気味な魔の手が街々を重苦しく沈黙させました。横浜、神戸に次ぐ北海道随一の港町函館に、7月横浜から入港した船舶の船員2人がまず発病、防疫対策も幼稚で、まともな消毒薬さえなかった当時のこと、瞬く間に患者総数1,200余人、うち死亡も842人を数えたといえます。特に現在の高砂町通りを流れていた願成寺川の水を飲用していた東川町、西川町、鶴岡町付近は汚物を洗った水を飲むため、目も当てられない惨状で、こうした経過から、明治22年（1889）横浜に続き日本で2番目の上水道がつくられる要因となりました。

造船界も様変わりし2019年調査の受注量は韓国41%、中国が34%、日本が16%と、かつての造船王国日本の面影はありません。「函館どつく」も今は名村造船の傘下になっているが、明治38年（1901）1番船の新造船「第2近洋丸」から現在900番船を超え千番船を目指し新造船を建造しております。

悪い話ばかりではありません、昨年7月には「北海道・北東北の縄文遺跡」が世界遺産に登録されるという朗報がありました。

また、今年は微力ながら「箱館丸」をふね遺産に応募し認定されました。この事は、初めて箱館が開港し、クリミア戦争でイギリスの産業革命後の新たな技術がこの地にいち早く定着し発展していった証でもあり、現在は辛うじて“造船の街函館”を維持しております。



新庄光正氏事績

来年は「開港5都市会議」が函館で開催されます。函館は、他の都市から比べればいち早く開港したものの、現在は人口減少に悩む小都市です。しかし歴史があります。ロシアの南下を食い止め、樺太・千島列島の漁業開拓の高田屋嘉兵衛、日米和親条約による初めて鎖国を解き開港された箱館、戊辰戦争箱館海戦での戦いがあった箱館。戦後は「イカの街函館」の象徴、イカふすまも消え、同時に悪臭も消えました。「北洋漁業の基地函館」も200カイリ規制で母船式漁業も廃止、当たり前のように集結した母船・独航船の姿も消え失せ、西浜岸壁にあった日本水産・かまぼこ型の大洋漁業の建物もなくなり、小樽と同じ時代の東洋製缶のドデカイ姿も消え失せてしまいました。明治41年に就航した「比羅夫丸」から80年続いた青函連絡船の行き交う姿や銅鑼の音が消え失せてしまいました。

しかし、終戦と同時に樺太から30万人以上が引揚げ、数万の人が函館に定住し、その面影は改良住宅として弁天町・大町・宝来町・五稜郭町に残っています。

函館には目に見えない歴史的資源・観光資源が数多く隠れています。この坂下にある旧棧橋（東浜棧橋）が新たに模様替えしました。残念ながら昔の棧橋としてのイメージがありませんが、明治・大正と本州からの開拓移民が沖泊りした船から下りた北海道最初の地であり、この棧橋から陸路・海路で奥地に向かったのです。

こうした景観や歴史は放って置けないとの思いから、多くの人に知ってもらいたい、見てもらいたいと動画を作成、シニアのユーチューバーでもあります。

「港はこだて史」で検索してみてください。

## ✧ 新城光正氏へのお祝いスピーチ ✧



函館の歴史と風土を守る会会員  
**里見泰彦 様**



高校時代からの友人  
**恩田昭二 様**

新城さん、この度の歴史ある神山茂賞奨励賞の受賞おめでとうございます。同じ歴風会に籍を置くものとしてうれしかぎりです。

歴風会はこれまで40年以上にわたり活動を継続、函館の数ある団体の中でも活発に動いている団体の一つであろうと思います。会の中で、新城さんはひときわ異色のメンバー、知識豊富で前向きと言う人なら沢山いますが、それに加えて声が大きく、いつも笑顔で、多くの仕事をこなす人と言えばそれは新城さんをおいて他には見当たりません。通常の作業以外に、函館の小中高生を対象にしたふるさと写真展を20年以上にわたり担当し、若い人たちが故郷函館の、ふるさとらしい風景、「函館の良さ」を見つけ出す作業に大きく貢献してきました。この作業は非常に地味で労力を要しますが、殆ど一人でこれをこなしております。

この度の受賞作「造船現場から見た 港はこだて史」ですが、まず驚かされるのは冒頭16ページにわたり掲載された48枚のほぼ定点観測と言える港の見える風景です。「よくここまで集めたな」と言うのが実感です。

新城さんが函館の歴史に関心を持つようになったのは、偶然にも函館市から依頼を受けた洋式帆船「箱館丸」の復元で、それ以来、「函館どつく」が建造した船の写真収集と保管につながりました。

ますますのご活躍をお祈りしています。

本日は受賞、誠にありがとうございます。私は新城光正さんと函館西高同期で、現在もパソコン教室でお教え頂き、懇切丁寧な指導にいつも感謝しています。

この度は創立明治14年（1881）以来141年間、函館の歴史文化振興の礎を築かれ、その伝承普及発展に多大な寄与貢献される函館文化会より、誉れ高い受賞の栄誉に浴されご同慶の至りです。

新城さんは、常々函館どつく人生42年間は 造船業に鎮魂・精魂傾け、ものづくりで得た人間関係の大切さをたくさん学ばれ、退職後は培われた船舶設計技術を通して、体得、経験した記録や記憶をもとに後進の研究にも資するものを残したいとの新城イズムの深遠なこだわりが随所に伺える著作を纏め上げられました。

新城さんは、本書を通して愛するふるさと函館の素晴らしさを次代に伝え繋いでいく中で、函館の歴史的風土を陰で支えられた多くの先達、同僚、仲間の存在を知ってほしいと強調されています。

新城さんは、潮風薫る巴湾を見下ろす西部地区に生まれ育ち、幼少・青年期は函館港を遊び場に、北洋漁業独航船・母船往來の見聞や港内ヨット周回などで心躍らせ、好奇心探求心旺盛な“港の申し子”でもあり、今もふねへの夢とロマンを拵げ燃え続けています。

最後に、体調に十分ご留意ご自愛されご健勝ご活躍を心より念じてやみません。

### ● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けていますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しています。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、FAX、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんか。「入会申込書」をお届けいたします。

### ● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っています。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

### 事務局からのお願い

※会員皆様の「住所」「電話番号」に変更が生じましたら、事務局に連絡をお願いします。

## 令和4年度 函館文化会講演会

### 『日本最初の気象観測所・函館』を演題に開催しました

函館文化会では、令和4年10月15日（土）函館市中央図書館視聴覚ホールにおいて「函館文化会講演会」を開催しました。本講演会は、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年行っているもので、この度は気象庁函館地方気象台長 橋本 勲氏を講師にお招きして「日本最初の気象観測所・函館～気象台150年の歴史とこれから～」と題しての講演で、新型コロナウイルス感染症拡大防止のためマスクの着用をお願いするなどの感染防止対策を図るなかでの開催でしたが、多くの会員、市民の皆さんに参加いただき盛況裡に終了いたしました。

橋本氏は、日本の中でも北海道で何故古くから気象観測が行われたか、また、気象観測開始の古い順や函館気象台の名称の変遷、気候観測所の誕生、観測記録と天気予報、市民に一番馴染みが深かった「函館海洋気象台」となったこと、函館地方気象台のこれからのことなど様々な資料をスクリーンに映し出しながら、ときには、逸話を交えながら楽しく解説いただきました。

明治5年（1872）に何故、函館で日本最初の気象観測が行われたか、それは幕末当時の背景として、伊豆の下田と並び海外への窓口となった開港場「箱館」には、多くの外国人が渡来し在留するようになり、彼ら自身の必要性から、不統一ながらも気象観測が既に函館で実施されていたため、函館で気象観測が行われてから3年後の明治8年（1875）に東京、3番目は翌明治9年（1876）に札幌で観測が行われました。さらに、当時の観測を行っていた記録が「大気変動測量」として残されており、観測は1日3回（朝の9時、午後の3時、9時）行われ、日本最初の天気予報は、明治17年（1884）に東京で出されています。

函館気象観測所は、昭和15年（1940）に現在の美原に中央気象台函館測候所として移転し、2年後の昭和17年（1942）8月に市民馴染みの「函館海洋気象台」となりましたが、こうした函館の気象観測の歴史の一端に触れるお話しに、聴講された皆さんは吸い込まれるように聞き入っていました。なお、今回の講演内容について、講演録をもとに概要をまとめましたので、今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければと存じます。

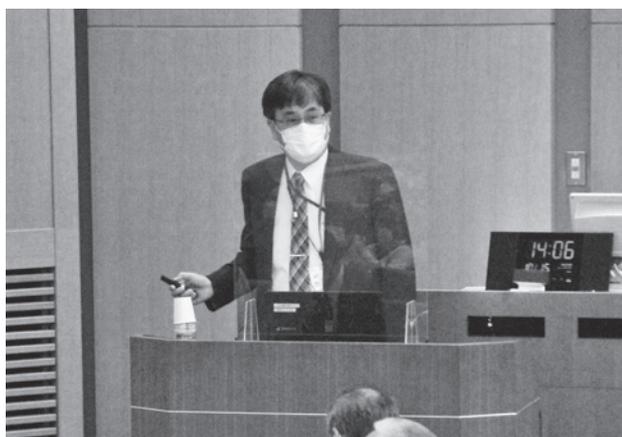


函館文化会講演会（令和4年10月15日）・函館市中央図書館

## 日本最初の気象観測所・函館

### ～気象台150年の歴史とこれから～

気象庁函館地方気象台長 **橋本 勲**



只今ご紹介をいただきました、函館地方気象台長の橋本でございます。今回、150年という日本で一番古い気象観測所について、このような場を設けてお話する機会を頂戴し、感謝しますと共に、このように大勢の皆様が集まっていただきありがとうございます。函館の気象台長にはドサンコは少ないのですが、札幌生まれの私が久し振りのドサンコです。平成元年に気象大学校を卒業しました。気象大学校は、気象庁の所管する職員を養成

する機関で1学年15人、4年生を入れても全校60人という小規模な大学です。

### 気象観測開始の古い順位と名称の変遷

明治という開拓の時代が、日本の中でも北海道で古くから気象観測を行うという理由がありました。明治5年(1872)に函館で最初に観測を開始し、次が3年後の明治8年(1875)に東京、3番目は翌明治9年(1876)の札幌です。道内3番目の根室も明治12年(1879)で国内的にも5番目になります。そして、函館気象台の名称の変遷をみますと、はじめは明治5年8月26日「函館気候測量所」として創設され、明治15年2月8日に「函館測候所」と改称され、共に開拓使と函館県に所属していました。

その後、北海道庁所属となる明治19年1月26日に「北海道庁立函館測候所」と改称され、明治21年7月1日には「函館一等測候所」と改称、大正7年6月20日に「函館測候所」と改称されました。

次に国に移管されるのですが、戦争がらみの関係で非常に重要な組織であるということで昭和14年1月11日に「中央気象台函館測候所」と改称され、昭和17年8月25日に函館市民が一番馴染んでいた「函館海洋気象台」という初めて「台」が付く名称になったのです。その後、平成25年10月1日から札幌管区気象台に属する「函館地方気象台」という名称になりましたが、函館市民は余り知らないようであります。

ここで少し脱線しますが、何故「台」という名称なのかご存じですか。「台」は、演台、舞台など高いイメージがありますが、気象台以外の組織で「台」が付くのは天文台があります。天文台も高いところからものを見るのですが、気象台も実は高いところから雲を見たり遠くを見るという観測をします。昔は、天文と気象を一緒に観象台に上がりやっていたのですが、その後、気象と天文はそれぞれ分かれて行くようになり、一つは気象台に他方は天文台となりました。気象台の本質的な処は、高いところの上って遠くを見て雲の動きや気象の動きを観測するという必要性があるということで、空間的に遠くを観るというのが業務の本質で、今や気象台から遠くを観るだけではなく、いろいろな所に観測機器があったり、横津岳にレーダーがあったり、宇宙には「ひまわり」という衛星が非常に遠いところからものを観るという時代

になってきているというのが我々の仕事の本質です。

もう一つは空間的に観た現在の状況を使って未来を予想する、遠い未来を観るというのも気象台の仕事の本質の一つで、得られた現在の状況から将来どうな

るかを予測して皆さんにお伝えする。こうしたことから「台」という言葉が好きで、渡島・檜山管内で台長と呼ばれるのは私一人だけです。



福士成豊

### 気候測量所の誕生

明治5年船場町(現在;末広町)に、福士成豊が観測を始めたところは自宅で、福士は箱館丸を造った続豊治の子供でしたが、養子に出ていたために名字が違います。福士成豊が測量を始めたのが明治5年(1872)8月26日、その50年後、大正11年(1922)8月26日に福士は死亡し、さらに、100年後が令和4年(2022)でありまして、今年の8月26日に気象台員が称名寺にあるお墓にお参りに行きました。函館の観光名所である金森倉庫群の片隅に「日本最初の気候測量所」の看板が設置されています。何故、函館で日本最初の気象観測が行われたか、それは幕末当時の背景として、伊豆の下田とならび海外への窓口となった開港場「箱館」(明治2年(1869)以降は「函館」)には、外国人が渡来し在留するようになり、彼ら自身の必要性から、不統一ながらも気象観測が実施されていました。記録によると、ロシア人の医学者アルブレヒトは、安政6年(1859)から2年間、箱館付近の自宅で気象の観測を行い、万延元年(1860)には雨と雪日数を観測していました。また、ブラキストンライン(津軽海峡を境とした北海道と本州の動植物境界線)を発見したほか、いくつかの科学的業績を残したイギリス人実業家ブラキストンは、元治元年(1864)から明治4年(1871)までの8年間、降雨雪日数を観



ブラキストン

測し、慶応4年(1868)からは気圧や気温の観測を行っていました。開拓使函館支庁の福士成豊はブラキストンの観測を引き継ぎ、船場町にあった自宅に観測機器を設置してこれを「函館気候測量所」とし、明治5年

(1872)8月26日から観測を開始しました。これが我が国で公にやり始めた気象観測所における気象観測の始まりです。

気象観測所の場所も現在の町名で云いますと、最初の未広町から明治12年(1879)に若松町、大正2年(1913)に海岸町、そして、昭和15年(1940)から現在の美原に移っています。

### 観測記録と天気予報

当時の観測を行っていた記録が、「大気変動測量」として残されています。観測は一日3回(朝の9時、午後の15時、21時)行われ、観測項目は、気圧(インチ～水銀柱がどれだけ上がるかを観る)、気温(華氏)、風向、雨か雪かの(降水量)、天気、天気の概況が原簿に書かれていて、気象台に残っているのは明治6年(1873)が一番古い物です。当時の記録が、測量という言葉で残っているのは面白く、私達は測量という言葉を道路で何か



海岸町にあった気象観測所本庁舎(大正2年)

を計っているというイメージを持ちますが、当時は何かを測っていると捉えているようです。そのうち、福士成豊の自宅であった函館気候測量所は、明治12年(1882)に高砂町へ建設移転し、明治15年(1882)2月8日に函館測候所と改称しましたが、大正2年(1912)の大火で焼失し、当時の報告書に書類を一部しか運び出せなかったとの記述があり、それで先程お話した記録が明治6年のものが一番古いのではないかと考えています。

日本最初の天気予報は、明治17年(1884)に東京で出されましたが、それより早くに出されていたものが警報に類するものでした。日々の観測で似たような現象が起きると、次にならぬであろうことが予測できるようになり、危ないと云うことを夜間であっても事前に知らせる方法を考えていたのです。今でも、低気圧が近づくと日本付近は西から東に天気が変わり、最初は東寄りの風で気圧が下がってきますが、その後、悪い低気圧が離れると気圧が上がり、天気は変わり西風へと変わっていくことが分かり、警報に類するものを知らせるようになったのです。

因みに、6月1日は「気象記念日」ですが、これは明治8年(1875)6月1日に東京・赤坂葵町(現在のホテルオークラの辺り)に日本初の東京気象台が設置されたことを記念して、昭和17年(1942)に制定されました。そして、4日後の6月5日から気象観測が開始され、9年後の明治17年(1884)6月1日に天気予報が出されるようになったのです。

### 函館海洋気象台の時代と高風丸

昭和15年(1940)に現在の美原に未だ中央気象台函館測候所として移転し、2年後の昭和17年(1942)8月25日に皆様お馴染みの「函館海洋気象台」となったわけです。海洋気象台としては、全国に4箇所あるうちの2番目で、1番目は神戸、3番目は長崎、4番目は舞鶴があって、海洋観測船を所有して海の観測を行っていました。函館は高風丸という船で主に北海道周辺・本州東海海域において海面から海底までの水温、塩分、流れ、海水に含まれている栄養源などの観測をしていました。この高風丸という名前の由来は、大変おめでたい内容の謡曲があり、親孝行で素直な心を持つ「高風」という人物が、海に棲む伝説の動物の不思議な力によって富貴の身分になるという話にあやかり、海洋気象観測を通じて、

気象界に、日本に、そして世界に幸福をもたらしてほしいという願いがこめられているそうです。

高風丸はこの他にも海洋の状況を把握し、地球規模での環境保全に役立つ調査観測や自動高層気象観測装置により上空25,000mまでの大気の状態観測も行っていましたし、奥尻地震のときには支援物資を届けたりしていました。

一方、船ではなく気象台の中で、海の予報、海上の予報・警報を受け持っており、函館海洋気象台は北海道の南半分、檜山を含め、日高、釧路の東方海上の天気予報と警報を発表していました。残りの半分は、札幌がやっていたのですが、今は、纏めて札幌管区気象台が行っています。この他北海道特有の海水予報、冬になると海の氷で船が損傷したり、航行できなくなることもあると云うことで氷の予報もしていました。当時の函館は、気象庁の下に位置していましたが、気象観測方法や装置の発達などにより平成22年（2010）3月31日で函館海洋気象台での海洋気象観測が終了し、海洋気象観測船「高風丸」が廃止となりました。そして、平成25年（2013）10月1日から「函館地方気象台」と改称し、現在は札幌管区気象台の下に位置しています。平成22年（2010）4月以降、函館地方気象台（旧函館海洋気象台）が担当していた北海道周辺・本州東方海域は気象庁本庁（東京）所属の凧風丸・啓風丸が観測しています。

### 函館地方気象台のこれから

基本は、観測をしっかり行い、現在の現象を捉えることです。気象台の「台」は空間的に物事を観ることであり、職員も勿論、気象台の場所でしっかり観ていますし、様々な観測機器、例えばアメダス、ラジオゾンデ（空は全て繋がっているので、全世界同時のタイミングで揚げます）、気象レーダー、気象観測衛星ひまわりなどからのデータもしっかりと観ることが大切で、各地の観測データが東京のスーパーコンピューターに送られ、大気もある物理法則で動いていることを利用し、速度や精度を高めるためにある近似値を使いながら将来を予測する計算式に基づいて未来の天気図を作製しているのです。未来の天気図をもとに各地の予報官は、明日や明後日の予報を情報として伝えています。雨の方は、時間的に先を診ることが出来るようになってきている。しかし、地震は似たようなことをやっているが難しく、以前は予知



函館海洋気象台当時活躍した「高風丸2世」

をすることも考えたが予知は不可能であり、そこで、今は地震が起きてから検知し、直ちに伝える方向に変化しています。火山は、マグマが上がってくるので何となく分かるようになってきています。

今後の大事な取り組みは、地域の防災力を高めることであり、気象台が各市町村との連携を図る中で平時においては市町村長と気象台長の「顔の見える関係」を構築・深化したり、各市町村に個別に訪問し、防災気象情報の利活用方法の説明や各市町村の大雨警報基準等と避難情報等の発令基準などとの関係について認識を共有することを積極的に働きかけることが必要と考えています。さらに、緊急時には防災気象情報の適時的確な発表や納得感を伴った気象解説を実施することや気象台からのホットライン、気象台コメントにより危機感を確実に伝達することなどの取り組みが必要と考えています。

### むすび

近年の地球温暖化により大雨の頻度は増えています。150年の歴史でも経験していないことが起きる時代になっています。大雨・台風・地震・火山噴火等の自然現象を人の力で止めることは出来ませんが、事前の備えや緊急時の対応により、被害を減らすことは出来ます。気象台は、これからも地域の皆さんと防災・減災を目指して共に歩みます。

本日は、ご静聴、ありがとうございました。

（編一橋本台長は、令和5年3月31日付けで退職しております）

# 函館文化会 市民公開講座

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探求しながら、受け継がれてきた「郷土の歴史・文化」を後世に継承することを目的に「市民公開講座」を開講しています。

今年、3月に「大火に学ぶ函館の街づくり」、9月は「函館市・亀田市合併50年 昔の亀田探訪」<sup>タイムスリップ</sup>をテーマに2回の講座を開催しました。3月は、山内一男氏と花巻英典氏を講師に迎え、会場は函館市消防本部のご協力でご協力をいただき、9月は山田雄一氏を講師に函館市亀田交流プラザで、いずれも想定した人数を超える会員・市民の方に参加をいただき、それぞれ講師の興味深い話しに受講された皆さんから好評を博しておりました。また、3月の講座では、講座修了後は普段なかなか見ることが出来ない消防施設や特殊消防車両等の見学を行いました。(19ページ参照)

なお、2回の市民公開講座の内容について、講演録をもとに概要をまとめましたのでご紹介します。

## 第10回 市民公開講座（令和5年3月17日）・函館市消防本部

### 函館の街並みと景観と大火

#### ～まちや建物に残したもの～



函館文化会様から「大火に学ぶ函館の街づくり」をテーマに話してくれないかとの依頼を受け、明治以降の幾多の大火が市街地形成に与えた歴史を話して参考になればと引き受けた次第です。

私は十字街銀座通りで祖父が営む旅館で生まれ、その後、父が商店を営んでいた函館駅近くで育ちました。高校を卒業後、函館を出て東京で19年間生活し、函館に戻ってきました。東京では函館のまちや他の町を色々調べたものですが、東京から戻って37年になります。

#### 函館の建物のルーツ

函館の建物（街）のルーツは何かと考えると、北海道の開拓と関係があり、開拓は古くから奥羽や北陸の人知られ、出稼ぎの人達によって行われた。仮住まいの小屋は、滞在時間が長くなり永住に変わると、大工による

(株)建築企画山内事務所 山内一男  
代表取締役

本格的な家になる。家は故郷と同じ様式が多く、出稼ぎの根拠地として松前、江差がある。江差には石川県の材料と建物様式を見ることが出来る。一般の家は、屋根は板葺きから瓦葺き、トタン屋根、外壁は板張りから左官壁、煉瓦壁、RC壁に変化します。(明治元年頃や明治5年頃、明治9年頃の写真で当時の街並みを説明) 函館は、火災が多く大切なものを収蔵するために蔵を造って瓦をのせ、さらに、瓦の下にモルタルやコンクリートを重ねて屋根を保護していた建物が数多く見られた。

#### 函館の建築技術と大火

函館は、明治11年や12年の火災が街の構造を変えた。そのとき何をしたかということ、街区を直線的に整備した。このような街の区画にしたのは、当時、北海道開拓使に村尾という官吏がおり、明治11年函館の商人たちも加わり開拓長官・黒田清隆らに随行してウラジオストクに渡ります。その時に見たウラジオの街は、海と山があり函館によく似ており、さらに傾斜地に向かって直線的な道路、そして湾に平行な道路が整備されていたということが報告されていた。随行した函館の渡邊熊四郎などの政界人、財界人が函館の街をよくするためには、こうした考えを取り込んでいくことが必要だと進言したことが想像されます。そして、和洋折衷の洋館の街並みの雰囲気は、ウラジオの街並みに似ていて、傾斜地に映えるもの

となっている。このように戦前の函館の町は、幾度かの大火に見舞われながら都市形成を進展させ、現在の街区の骨格の基本が出来、道路が防火線の役割を担い、港を見通せる独特の景観と歴史的環境を残した。そして独自の建築技術が建築に活かされている建物を見ることが出来るようになったといえます。

函館の街を考えるときのキーワードは二つあり、一つは大火、もう一つは北洋漁業です。この二つは函館にとってどうしても譲れない歴史的なワードです。

### 明治40年の大火後の洋館の外壁は

大火が頻繁に町を襲い、火災に強い建物が望まれるようになった。当初の旧ロシア領事館を見ると外壁は煉瓦で造っても構造は木造であり、窓や屋根、軒裏などの隙間から一旦なかに火が入ると燃えてしまう。建設当時の平面図と大火後の平面図と比べてみると、はっきりと火災に対する考え方の違いが見えてくる。

大火のことから採用されなかった計画案は、ジョサイア・コンドルのものです。彼の弟子が東京駅丸の内駅舎や日本銀行などを建てた辰野金吾、函館とも縁があり、函館図書館書庫の建物を辰野事務所が行っている。

### レンガからコンクリートブロックそしてコンクリートへ

大正10年の大火は、山麓に火がいかずに明治の建物が残り、その後出来た建物は、大正時代の防火性を持った貴重なものとなりました。そして防火のためにどのような工夫をしたかと言うと、大火後に2人の建築家が関わることとなります。一人は、函館の各種建築に携わり建築調査結果を建築雑誌で報告した関根要太郎と、もう一人はL型コンクリートブロックを開発、コンクリートより低廉な耐火建築物を提案した中村 鎮です。

銀座通りには、現在もL型ブロックの建物が残っていますし、当時は函館市内に会社も作っています。L型ブロックは壁や床の構造部材としてありました。煉瓦からブロックに移ったのは、亀田村の煉瓦工場では上質なも



明治40年大火後 西部地区の商店街(防火建築物)



大正10年大火後の銀座通りの街並み(耐火建築物)

のが作れなく、大正時代には煉瓦工場が江別に移ったこともあり、段々とブロックに移行したと思われます。

中村 鎮は早稲田大学理工科建築科を卒業、その後、大正10年の函館大火により火防線として「銀座街」、「二十間坂」が指定され、この大火を機に函館に赴いて、自身の考案による中村式鉄筋コンクリートブロック造を用いて「銀座街」の建設にあたり同年に中村建築研究所を設立しました。

特許中村式鉄筋コンクリートブロック造の普及、研究に努め、大正9年以降施工した建物は全国に119件あり、地域分布では東京周辺が最も多く、北海道には30件、そのうち大正9年10月起工の映画館「錦輝館」を初めとして25件が函館に集中しています。函館臨海研究所にも使われていましたが、現在は鉄筋コンクリート造となっています。

一方、関根要太郎は、東京工業高等学校（現、東京工業大学）建築科の専科生として学び、卒業後、大正5年、日本建築株式会社（後に日本勧業会社）に入り、不動貯金銀行（りそな銀行の前身）の店舗設計を多く手掛けています。大正7年、関根は不動銀行函館支店の建築のため来函、この時、函館海産同業組合事務所（海同会館）の設計を依頼され、大正9年1月に竣工させています。末広町に現存するこの建物は、関根の設計の才能を大きく開花させる仕事となり、大正9年に東京・銀座に「関根建築事務所」を開設しました。函館では区立病院外来診療棟（基坂・大正11年竣工）の設計を担当、着工直後の大正10年4月西部地区で大火が発生し、市内の大半が焼失してしまいました。そのため病院建設と同時に、石塚商店（末広町）、亀井喜一郎邸（元町）、函館病院内科部長の爾見淳太郎邸（船見町・現存せず）、市議員の泉泰三邸（曙町・現存せず）の設計を担当しています。特に泉邸は当時の日本住宅ではまだ珍しい、鉄筋コンクリート製のモダン住宅だったといえます。その後も函館

での仕事は続き、大正15年に関根は函館の地場銀行である百十三銀行本店（末広町・現SEC電算ビル）、同東京支店、泉泰三の湯の川別邸の設計を手掛けています。昭和9年3月21日、函館大火の報を聞いた関根は、火災鎮火の翌日に来函し、4月、その被害状況を纏めた論文「函館市の火災報告」を発表しています。昭和11年、大火で損傷した不動銀行に代わる新店舗を設計し、これが函館で最後の仕事となりました。またこの建物は戦後、協和銀行の店舗として昭和53年まで使われていました。



昭和9年大火後の大門駅前通り

### 大正10年の大火前の洋館の外壁は

大正9年に建てられた木造3階建て海産商同業組合事務所は、耐火のため木摺りの上に平瓦を張り付け、モルタル塗りの外壁です。建築家関根要太郎の設計、技術は受け継がれていて、函館の街づくりや建築技術の変遷は、函館の火災、大火と深い関わりがあります。

旧仁寿生命函館支店の建物は、大正9年の大火後の大正10年に建設され、設計者は不明ですが平瓦とモルタルが塗られています。大正10年・昭和9年の函館大火後の被害調査に関根要太郎の名前がみられます。

### 函館の街並み景観と大火

「建物や街並みは、時代・歴史を伝えている」

明治時代の街並みは、函館山の麓・西部地区に見ることが出来ます。しかし、明治11年と翌12年の大火によって、明治初期の建物を消失させ、石・レンガ・土蔵造りの防火建築様式の洋風商店や和風商店の建設が進みました。

明治40年の大火は、この地区の大半の建物が被災しま

したので、現在の西部地区の木造建築物の街並みは、この大火以降に建設された建物によるものです。

大正10年の大火は、そのとき賑わっていた地区、現在の十字街周辺に大きな被害を及ぼし、十字街銀座通りは防火線を設置、コンクリートブロック造や鉄筋コンクリートの耐火建築物の街並みとなりました。

中村式L型コンクリートブロック造りの建物は、建築工法史に残る貴重な建物であり、大正時代の街並みを残しています。

昭和6年、函館は人口20万人を超え、関東以北での最大都市となっていました。昭和9年の大火は、市街地の三分の二を消失させ、中心部であった松風・新川・大門駅前通りの中心部地区を灰と化してしまいました。

しかし、この大火の後昭和の函館復興計画が作られ、デパートや商店街が建ち始め街並みが形成されていきました。昭和時代初期の貴重な街並みです

これで、私の話を終わらせていただきます。長時間にわたりご清聴ありがとうございました。

## 第10回 市民公開講座（令和5年3月17日）・函館市消防本部

# 大火に学ぶ函館の街づくり

～街の安全・安心を守るために～

函館市消防本部予防課長 花巻英典

はじめに

この度、函館文化会「市民公開講座」の開催に際し、「大火に学ぶ函館の街づくり（～街の安全・安心を守るために～）」と題して、昭和9年（1934）3月21日に発生した函館大火を中心にお話をする大変貴重な機会を頂き心より感謝申し上げます。函館の街を火災から守り、安全・安心を築いてきた歴史について、消防の観点から当



時を振り返るとともに、函館消防が多くの大火を経験し、その経験からどの様に消防力を強化してきたのかといった変遷について振り返りたいと思います。

## 函館の大火史

私たちの街函館は安永8年（1779）以降、100戸以上焼失した火災が多くあり函館大火史などに記録されています。その中でも明治40年（1907）、大正10年（1921）、昭和9年（1934）の火災は、被害が大きく、特に昭和9年の火災は最大規模で、未曾有の大災害となったものです。

このように、多くの大火を経験している函館ですが、「函館大火」と言うと、一般的には一番被害が大きかった「昭和9年の大火」を指すことが多いようです。

### 「函館大火」の概要

そこで、昭和9年の大火の概要を申し上げますと

- (1) 発火場所 住吉町91番地（現在の住三吉神社付近）
- (2) 発火日時 昭和9年3月21日 午後6時53分頃  
（6時58分に西川町第2部望楼発見）
- (3) 鎮火日時 3月22日 午前6時
- (4) 発火原因 旋風のため火元木造2階建の屋根飛び炉火より発火す
- (5) 焼失町 全焼 22町、半焼 18町
- (6) 焼失面積 416.39ヘクタール（東京ドーム約89個分）
- (7) 焼失建物棟数 11,105棟
- (8) 焼失世帯数 22,667世帯
- (9) 死者 2,166人
- (10) 負傷者 重傷者 2,318人 軽傷者 7,167人
- (11) り災人口 約102,000人（当時の人口約22万人）

### 死者の内訳

函館大火では、2,166人の尊い命を奪い大災害となりましたが、死者の内訳を見てみると、焼死748人、溺死917人、凍死217人、窒息死143人、その他29人、また収容後火傷や肺炎などに因る傷病死が112人となっており、火災による焼死者より大森浜で波にさらわれ溺死した人、全身ずぶ濡れになり凍死した人、橋の崩落で川に転落し窒息または凍死した人、寒さで肺炎になって亡くなった人などが多く、実に死者2,166人のうち1,277人、全体の約6割が溺死や寒さの中で亡くなっており、この事実を改めて知ることとなりました。

### 大火になった主な原因

この火災が大火となった原因について、函館市史に掲



昭和9年の函館大火図

載されておりますが、要約すると

- (1) 発火より消防署において知覚するまで5分を要した。
- (2) 風力甚大で火災の伝播速度大、飛火多くなお風向の回転方向が最悪だった。
- (3) 火元付近は特に地形の関係により延焼申しきりに風の回転、突風が起こった。
- (4) 発火地点、海岸付近は特に矮小粗悪木造家屋連坦し、かつ全市に亘り粗雑木造家屋が多かった。
- (5) 防火地区極めて少なく、広場、公園等の都市計画上の施設が完備してなかった。
- (6) 発火地点は水道終点であるため水圧弱く水量乏しく、加えて風力強く水勢乱れて局所注水不可能に陥り、消防組の活動が思うようにできなかった。
- (7) 道路狭隘で消防組の部署変更が困難だった。

### 教訓

この大火で得た教訓は、

- (1) 強風時には全市一丸となって火災予防の徹底を図る。
- (2) 当市は気象上、市街構成建物等からみて絶対強力かつ機動性に富む消防力が必要で、時・場所にかかわらず火災は初期に鎮圧できるよう覚知機関、消防水利、機械器具、人員等を強化充実する。
- (3) 火災防御線となる広い道路、これに布設する強圧豊富な水量を有する消防水利を必要とする。
- (4) 強風時には市民自らの手による飛火警戒を実施する。
- (5) 建築物の不燃質化と防火的都市計画を必要とする。

これらの教訓は、市民の安全・安心を守るため、その後消防体制はもとより、まちづくりにもいかされてきました

### 函館の消火栓（函館大火の反省から）

函館市では明治22年（1889）から水道管が布設され、地下に埋設された地下式消火栓を使用していましたが、昭和9年の大火の反省、教訓から素早く消火活動ができるように地上式消火栓の導入を決め、翌年に防火用水道の整備を始めるとともに、当時、日本には地上式消火栓の参考となる都市がなかったため、担当者をアメリカに派遣し、函館独自（函館型三方式地上式消火栓）の形や大きさを決め、昭和12年（1937）から使用している。函館型の特徴は、消火栓の内径が150mmに125mmの放水口が2ヶ所、65mmの放水口が1ヶ所と取水能力が大きいこと、栓体が黄色で目立つという特徴があり、函館市内（旧函館市内）で見ることができます。

### むすびに

函館市消防本部では、大火の教訓の一環として、函館大火23周年に当たる、昭和32年3月21日、午後2時から「蓬萊、宝、東川各町にまたがるグリーンベルトにおいて、自衛消防隊や地域住民が参加して「烈風下火災防衛演習」という消防訓練を行い、消防ならびに市民の烈風下における消防体制の強化を図っており、令和となった今も、毎年3月21日には訓練を実施し、先人が築き上げてきた消防力を更に強化するよう訓練を重ね向上を図っています。



大森町 大火慰霊堂での消防訓練の様子

また、函館大火のような大惨事を二度と繰り返さないため、毎年3月21日を「函館大火のあった日」とし、一般家庭への防火訪問、消防訓練や消防車による広報などを行い、市民一人ひとりに防火の呼びかけを行っています。さらに、毎月21日を市民が自ら進んで防火の点検などを行うことを目的に「防火の日」と定め、市民の防火意識の高揚を図っております。

終わりにになりますが、これからも消防は、火災をはじめ大規模化・激甚化する自然災害等に対し、職員・団員が一丸となり、函館の安全・安心を守るため取り組んでいきたいと思っております。

（編…花巻英典氏は、令和5年4月1日付けで消防本部庶務課長に異動しました）

## 第10回「市民公開講座」は、函館市消防本部で開催しました



消防指令センターを見学する参加者



函館市消防本部庁舎

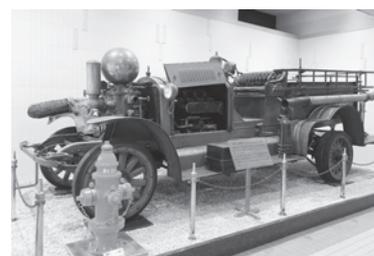


救助工作車



馬引蒸気ポンプ（大正初期製）

3月17日（金）、「大火に学ぶ函館の街づくり」をテーマに開催した第10回「市民公開講座」はお二人の講師を迎えて函館市消防本部の講堂をお借りして開催しました。講座修了後、市民の生命と財産を守る消防施設や近代装備を備えた消防車両、また、1階ホールに展示されている昭和9年の大火にも活躍した日本国内に現存する消防ポンプ自動車で最も古く「アーレンスフォックス号」などの解説を聞きながら案内していただきました。



アーレンスフォックス号（大正5年製）

# 函館市・亀田市合併50年 「昔の亀田 古写真で探訪」

タイムスリップ

NPO箱館写真の会会員 山田雄一



## はじめに

この度、函館文化会様から「今年は、函館市・亀田市合併50年を迎えるので、合併した亀田地域の変貌ぶりの写真を見ながら話をしたい」との依頼があり、集めた古写真で懐かしんでもらおうとこの場に立ちました。

話をするにあたり色々調べてみるうちに、亀田から函館へ流れている「亀田川」が函館・亀田両地域に大きな関わりを持ち、合併にも関係がありますので、今回はこの「亀田川」にも注目していきたいと思います。

## 亀田の成り立ち

その前に、亀田の成り立ちについてお復習をしておきたいと思います。亀田の成り立ちを見ると「国盗りゲーム」のような複雑な合併・編入の歴史があります。

明治35年(1902)に、旧亀田村、桔梗村、石川村、赤川村、神山村、鍛冶村の6つの村が合併して新亀田村が出来ました。この合併を機に新亀田村の村章が作られましたが、亀田村の名称から亀の形を図案化し、真ん中に農業の田を、周りに6か村が一体となって発展するという願いが込められ、函館市との合併まで引き継がれてきました。

合併当時、50年前の函館市との境界線は、概ね五稜郭の北側が亀田市でした。6か村が合併して新亀田村出来る前の旧亀田村は現在の海岸町から富岡町辺りまでの広い地域で、3回に亘って旧亀田村から函館へ編入・合併

が行われております。最初は、明治6年(1873)に「海岸町」が旧亀田村から函館へ開拓使・道庁の命令により編入され、2回目は、明治32年(1899)旧亀田村の19字を函館区に編入し、町名にすると万代町、新川町から高盛町、中島町、乃木町、五稜郭町、田家町等30町が函館区となりました。当時の旧亀田村の人口4,588人(563戸)のうち2,938人(265戸)が編入され、旧亀田村の約半分が移動したことになります。

また、3回目は、昭和24年(1949)「港町(五稜郭駅から有川棧橋)」で、これは編入ではなく両議会が承認した合併だったようです。この合併で、亀田村は海と接した土地を失うことになったのです。



亀田村章 (大正4年制定)

亀田村の名称から亀の形を図案化し、真ん中に農業の田、周りに合併した六か村が一体となって発展を願っている

## 「亀田川」の歴史

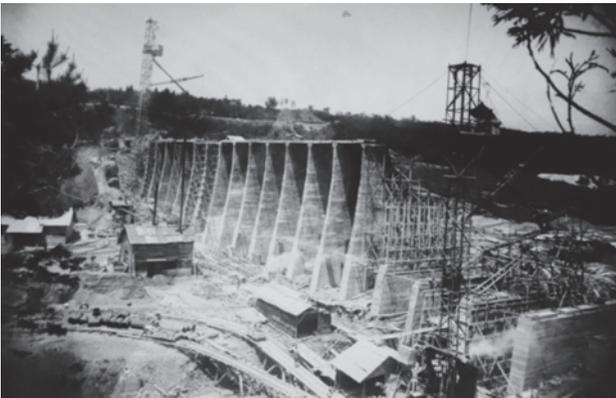
話を先に戻し函館と亀田の両地域に関わる「亀田川」の歴史を紐解いてみたいと思います。

江戸時代の初め頃、亀田川は函館港に注ぎ河口には交易船の停泊地で交通の要衝として昆布などの水産物の集積地でありました。また、亀田川の水で農業も行われ人々の集落ができ商家や往来人口も増えてきました。し

かし、亀田川は大きく蛇行しながら流れていたため、暴れ川だったようで、度重なる洪水などで港の水深が浅くなり交易船が着けなくなったことから、河口付近は段々と衰退して元禄の終わり頃には港も商家も役所も箱館へと移っていったようです。

亀田川はその後2回にわたり大きな改修工事が行われております。1回目は、当時函館港内に注いでいた亀田川を、水害対策と箱館への生活用水確保を目的に願乗寺（現在の本願寺函館別院）の僧・堀川乗経が、安政6年（1859）に現在の鍛冶橋付近で分流させ、長さ約4キロに及ぶ人工水路、願乗寺川を開削し、当時生活用水の不足していた函館山のふもとの市街地の発展に、大きく貢献したようです。

そして2回目は、明治10年（1877）頃からコレラなど伝染病が出始めたことで、近代的水道を作ることになり亀田川は大森浜への転注を行い、現在の中の橋付近から亀田川を掘削、新川と呼び明治22年（1889）には願乗寺川を埋め立てられ、現在の高砂通りとなっています。



工事中の笹流ダム(大正6年～13年)

今年でちょうど100年を迎えましたが、大正12年(1923)に函館市は市民の飲料水としての水道施設・笹流ダムを完成させました。ダムの上流には湯治場としての笹流温泉があり、ここは温度が低い冷泉の沸かし湯でしたが、笹流れダムが完成すると、函館はダムに汚水が流入しないように温泉を買収し、廃止しました。

また、旧陣川温泉（現在、函館伏白稲荷温泉）の奥には観音巡りの観音様が点在し、不動明王の奥の院にも湯治場もあったそうですが、これも笹流温泉と同じころに廃止されております。

このように、亀田川周辺の私有地を水源かん養の為に



青函博でパンダ会場となった赤川水源地（昭和63年）

買収することは、笹流ダム工事の頃から始められ、昭和の後期には482.69ha(東京ドーム103個分)にも及び、この地域は函館市が所有する土地で合併前から函館市赤川村のようなものでした。また、亀田市は亀田川を持ちながら水道用水は函館市に独占され、亀田市（町）は使えず、石川町に水道施設（井戸）を造り、それを水源として利用していたものの当然足りるものではなく、当時函館市との合併に反対の町長も「合併はしたくないが、水道は欲しい」と常々話していたそうで、この水道の問題も函館と亀田の合併の大きな要因となりました。

笹流ダムは前庭を市民の憩いの場として整備されており、春はサクラ、夏は水遊び、秋は紅葉と多くの市民が利用していますが、この水源地に「パンダ」がいたことをご存じでしょうか？昭和63年（1988）の青函トンネルの開通を記念して函館と青森両市で開催された「青函トンネル開通記念博覧会」（青函博）の際に、主会場は弁天町でしたが、赤川はパンダ会場として広場にパンダ舎が作られ中国から借りた2頭のパンダ“辰辰・慶慶”が展示され多くの市民が訪れたものです。（映像放映）



満開のサクラと笹流ダム

話は少し脱線しますが、現在の白鳥橋付近に「スッポンカッポン」と呼ばれる場所がありました。防火用水をとるために川に堰（せき）が作られてきたものようですが、五稜郭公園で行われた林間学校の子どもたちが水遊びをする光景を見られた方もあると思います。

なぜ「スッポンカッポン」と呼ばれたか諸説があるようで、堰を開けたり閉めたりするときの音が「スッポンカッポン」と聞こえたとのこと。亀田川の改修で直線化され、この「スッポンカッポン」は姿を消しました。

### 幻の鉄道「旧戸井線」

亀田地域の市街地を横断する「旧戸井線」、今をその面影も見せませんが、終戦直後の航空写真と見比べるとその状況がよく分かります。

戸井線は日本が戦争に突き進んでいた昭和12年（1937年）に工事を開始、戸井の津軽要塞、汐首岬砲台などに至る、軍事物資・兵員輸送目的の鉄道路線で昭和19年（1944）の完成を目指して9割方路盤が完成、湯川付近まで線路も敷設されて小さな蒸気機関車が工事用として走っていたそうですが、戦況悪化で資材不足となり、昭和18年（1943）に工事を中断その後工事は再開されなかった「幻の鉄道路線」です。



線路が敷設された戸井線（国道5号付近）

五稜郭駅から国道5号を高架で跨ぎ、赤川通りも高架で跨ぐため土盛りされて線路が敷設され、現在の本通り団地内を横切り、緑園通りを通過して湯川に進みます。

富岡町付近では、土盛りして高架線路を作るため土を掘った後が大きな穴となり、次第に雨水がたまり沼となったことから住民はこれを土方（作業員）が作った「どかた沼」と呼んでいたようです。

緑園通りは遊歩道となっており、街中の旧戸井線の遺構ですが、先日の新聞報道によると戸井線の遺構の一つ「開進橋」が解体されるという記事を目にしました。

戸井線は、湯川から汐泊川を渡って戸井地区に向かって工事が進められました。この周辺には多くの遺構が残っておりますが、残念ながら最近では橋桁が撤去されたり、また、撤去され新しいものに改築されているようです。

旧戸井線の遺構を代表する戸井地区にある「コンクリート造8連アーチ橋・汐首岬第一橋梁」、皆さんも何度か目にしていると思います。



コンクリート造8連アーチ橋（汐首岬第一陸橋・旧戸井線）

### 終わりに

最初に申し上げましたとおり、今年は函館市・亀田市合併50年を迎えました。当時の亀田市の人口66,552人でしたが、現在（令和5年6月住民基本台帳）の亀田支所管内の人口は110,577人と函館市の人口214,895人の45.7%を占めるまでになりました。ちなみに、これを道内都市の人口に並べると小樽市を上回り北見市の112,322人に次ぐ道内9位の人口規模になります。

その後、函館は平成16年の東部4町村の合併で大函館市となりましたが、今後も函館の発展を願いつつ、本日の講座を終わります。長時間にわたり拙い話をお聞きいただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

.....

**次回の市民公開講座は3月を予定**

第12回市民公開講座は、「郷土の歴史・文化」をテーマに3月中旬に開講を予定しております。

開講日時、講座の内容、講師等決定次第会員皆さんにお知らせいたします。ご期待下さい。

## 「卓話」

### ～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎総会後に「卓話」を開催しています。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終え、それで解散も如何なものか、この機会を活用して著名な方々の話を聞きながら、より会員の絆を深めようと始められたもので、そんな趣旨で開催の卓話」も今回で18回目を数えました。

今回は、函館ゾンタクラブ創設メンバー根津静江さんを迎えて、根津さんが函館にゆかりのある榎本武揚に思いを抱き令和2年自ら出版した著書「榎本武揚の点描」から榎本の生涯を解説、また、根津さんは国際俳句協会の会員でもあり、榎本を表現した俳句5句を紹介しながら、高齢とは思えない語り口でお話をいただきました。

なお、卓話でのお話しのポイントを根津さんにまとめていただきましたのでご紹介します。

第18回卓話（令和5年5月29日）

## 開国の先駆者『榎本武揚の点描』

根津静江



本日は、高邁な理念のもと、伝統の歴史と文化を紡いで来られた先人の方々が創立された函館文化会の定時総会でございます。その折、卓話をとのご依頼を頂き、誠に光栄でございます。

私は、昭和4年（1929）函館で生を受け、小学校、女学校では戦前の皇国史観に基づいた歴史教育を受けました。昭和20年（1945）を境に、戦後の研究断絶の中で、検証も行われぬ時代が私の青春時代でした。今一度、歴史を学ぶ機会と思いつつ時代は流れ去りました。

世界に目を向けると、ウクライナの侵攻はいまだ止むことなく、新型コロナウイルスについても「平時移行」

へ向けての対策をとられ「大切な命を守るためにどうすればよいのかを個人の判断」に委ねられ、自分が歴史となる現実の中で生きております。

令和2年（2020）、この「巣ごもり」の状態の時こそ「開国の先駆者『榎本武揚の点描』」を上梓致しました。歴史というものは、勝者の側面からの解釈というのではなく、埋もれた部分に真実があると思います。幕末、維新の歴史は勝者である薩長の歴史でしかない。「敗者の歴史こそ真実がある」と言われる作家も居られます。

私は、次の時代を担う若い方々に函館が関わった旧幕臣榎本武揚の足跡を伝えようと思い「1 義に生きた人生」「2 榎本武揚第二の人生」「3 函館・榎本武揚の点描」に分けて綴り、「いづみ」外交問題、その他について解かりやすく短時間で納まるようにと思い、俳句の力を借りて要所を17文字で表現してみました。いまや、小・中・高校生でも俳句をたしなむ時代であります。

それでは、一句ずつ説明させていただきます。一句目  
ふるさとや 埋もれる記録 春日さす（静女）

蝦夷の一寒村だった箱館が歴史の表舞台に登場するのは、江戸時代の北前船の活躍と幕末のペリー来航による開港であります。鎖国のこの歴史の事実は明治維新と榎本武揚につながっているのです。故郷函館にかかわる歴史を正しく知って戴きたいと思います。

## 二句目

### 五月雨や 有為転変 稀書の紐（静女）

義に生きた半生。オランダ留学の中で学んだ国際知識の結晶『万国海律全書』について詠んだものです。「有為」というのは佛教の因果律より常に変化していく〈現世〉ことです。「転変」というのは移り変わることです。現世は常に変化していきます。「稀書の紐」というのは、榎本がオランダ留学時に肌身離さず携えていた本のことです。フランスの法学者オルトランが著した『海の国際法規と外交』という書物で海に関する「平時」と「戦時」の国際法を解説したものとして、欧米諸国の規範になっていて、フランス語をオランダ語に解説したのはハーグ大学の教授フレデリックです。書物全体の写本を榎本に贈ったのが「万国海律全書」です。後に表紙を日本語で榎本が書きました。フレデリック教授に榎本が読み返し質問をし、その研究熱心さに感銘を受け「私より研究している」として書物全体の写本を榎本に贈ったのです。

## 三句目

### 陽炎や 蝦夷共和なる 夢の国（静女）

《大政奉還》により家臣の将来を考えた。〈蝦夷共和なる国〉幕府崩壊によって俸禄を失った旧幕臣の窮状を座視出来ないとして、蝦夷地の開拓を願った。二君に仕えず義を守る者の安心立命の地を作る決意を述べている。この嘆願は却下された上、艦隊引き渡しの要求を受



「卓話」のおこなわれた定時総会会場



発刊した図書と「卓話」のレジメ

けた。徳川家は駿河七十万石に移封されることに決まり、徳川十五代将軍の慶喜は、(徳川家を)田安家達に譲り、家来とともに駿府に移った。駿河七十万石で徳川家の家臣団五千人を養うことは不可能で、士族失業時代であります。今でいうリストラです。封地俸禄を失った者は身分を捨て、新政府のもとで働くということは武士の誇りにとり耐えがたい心境であります。榎本艦隊は、「朝廷に背く行動ではなく、旧幕臣の生活を守るために蝦夷地の開拓に向かう、蝦夷地の開拓は皇国のためになる。」と、江戸を去るときから嘆願している趣旨を朝廷・新政府に何とか認めてもらおうと粘った。旧幕府海軍副総裁として開陽丸艦長から明治という新しい体制の中で義を重んじた新しい生き方を求める旧幕府軍の男たちの中心となっていたのです。

榎本艦隊は、太平洋沿岸を北上し、明治元年10月20日、蝦夷地内浦湾の鷲の木浜（現森町内）に上陸した。箱館府（清水谷公孝知事）に、「徳川家が蝦夷地を借用の件、朝廷に願ひ出ている」旨を伝え、「許可下りるまで箱館府で我々の身柄を預かってもらいたい」との交渉を行ったのですが、問答無用と銃撃され、ついに戦うこととなり、箱館戦争の勃発でした。旧幕臣の土方隊、大鳥隊の働きによって箱館府知事の清水谷は五稜郭を放棄しチャーターした外国船で青森に脱出し、榎本軍はその日午後、無人になった五稜郭に入城し、上陸から五日間で箱館を掌握することになった。榎本は、蝦夷地の立て直しを行い、青森へ逃亡した箱館府知事に代わって港灣管理、地域を統治するための行政府を作らねばならないと、「自治政権を樹立する」蝦夷共和なる夢の国を目指して進み、これは、アメリカの「共和国（パブリック）」

をまね、投票により代表を選ぶというものであった。

四句目

#### 五月晴れ 恩讐をこえ 兩雄立つ (静女)

旧幕臣3千人、蝦夷地での夢は破れ五稜郭を開城。官軍将黒田清隆と敗軍将榎本武揚との出会いを詠いました。起死回生、九死に一生、奇跡が起こったと思うことなど。榎本の旧幕府軍の軍艦は全て消え去り、五稜郭は完全に寸断され、大きな岐路に立ちました。

5月16日の夜、別れの杯を交わした榎本は、その晩、降伏を決意し自室にこもり、自決を図ろうとしたが取り押さえられ自刃を果たせなかった。五稜郭内の将兵に「新国家建設のもとに、最後までよく奮闘してくれた。心より感謝申し上げます。運はこちらに向かわず志ならずとも今日まで我々の行為は無駄ではなかった。きっと、明日の日本のために生かされるに違いない。どうか諸君。決して、力を落とすことなく明日から正々堂々と生きていこう」榎本の言葉に兵士から男泣きが起こった。

翌5月17日五稜郭を出て亀田八幡宮應接所にて初対面の黒田清隆と会見し謝罪降伏を告げたのであります。榎本は、自らの命と引き換えに部下の生命の保証を願って降伏した。《戦争終結》明治2年(1869)、5月18日五稜郭は開城された。7ヶ月にわたった箱館での戦争は終わり、京都鳥羽と伏見の戦いに始まった戊辰戦争の戦火は全て収まった。戦いに敗れた大将はどうなるのか。榎本の処遇についても、天皇に逆らった朝敵であり、内乱罪に相当する大罪であるということで処刑されるものと思われたのです。

ところが、榎本と対峙し直接戦った新政府の大將黒田清隆が、処刑するにはあまりにも惜しい人物として救命運動に乗り出した。「皇国無二の書、新政府のために役立ててほしい」と『万国海律全書』を差し出した榎本の姿勢に感服したのです。敵の大將の救命運動を起こしても、黒田の栄達には何のプラスにもならない。却って、物議をかますようなことをやったことに、黒田の人間性、政治家としての大局観が現われている。《榎本処置の会議》榎本の無罪放免の決定はどのように下されたのか？黒田の救命論に対して、長州の木戸は「朝敵である榎本如き人間を赦すことは、”虎を野に放つ”ごときもので、断じて認めるわけにはいかない」と処刑を強調した。西郷隆盛は、「榎本を斬首にするのはもっての外である。



深川公園にある榎本武揚の像

彼が北海道に徳川武士を率いて行ったのは、徳川武士すなわち陛下の赤子を救い、それにより大御心を安んじ奉るためのものであって、彼こそ憂国の志士である」と強調したのである。

また、「徳川の恩義を忘れない義と情の人間である。そうした人間を長く牢内におくのは政府の失態だ。一日も早く優遇して新政府に重用すれば必ず御国のため盡くす人物になる」と語った。坊主になってまで榎本処刑に反対した黒田は、後に初代総理大臣伊藤博文に次いで明治21年(1888)二代目総理大臣となる。黒田清隆は戊辰戦争後の明治2年(1869)、二十代で開拓史次官となり、その後長官になって明治15年(1882)開拓史を廃止になる直前の14年まで北海道開拓に関わった人物である。13年間も北海道のトップとして北海道の黎明期に黒田が関係しない施策はなく、「北海道を作ったのは黒田清隆である」と言って過言でない。日本の歴史の大きな転換期幕末から明治黎明期に幕府軍が箱館に来たことにより函館に多くの足跡が残された。この価値ある歴史を次の時代に紡いで行く手立てとしてこの『榎本武揚の点描』の上梓を考えた次第です。

五句目

#### 星月夜 われもコロナも 素の粒子 (静女)

命あるものと共生することが人類の使命です。水の星(地球)、私達の生存している地球には限りない生命を宿しているのです。「素粒子」から出来ているのです。そのことを踏まえて、共に生きる「共生」の心で住み分けを計って行きたいと存じます。

長時間にわたり、拙い話をお聞きいただきありがとうございました。

## 特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ ⑧

### ～ テーマ「亀田」～

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化をテーマに取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史・文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでおります。

第8回を迎える今回のテーマは“亀田”。昭和48年12月に函館市と合併して、今年は50年を迎えました。当時の亀田市は、合併前から隣接する函館市の市街地拡大に伴って亀田地区の人口が急増、他市町村からの転入者増がその一因だったが、特に函館市からの転入者が多く転入者全体の3分の2が函館市からという状況でした。

人口の増加により一面のジャガイモ畑が宅地に変わり、湿地帯だった本通地区には宅地開発が進み、美原地区では商業施設が立ち並ぶなど函館の街の成り立ちにも大きな影響をもたらしましたが、そんな「亀田」地域にまつわる話を6人の会員の皆さんから投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

なお、次号（第86号）第8回のテーマは“湯川界限”としました。北海道三大温泉の一つである湯の川温泉を持つ、函館の奥座敷として発展した“湯川界限”にまつわる、会員皆さんの思い出やエピソード、「湯川」への想いなどをお寄せください。応募の要領等は36ページを参照ください。



函館山から望む亀田地域の住宅街



## 亀田合併50年を迎えて

近江茂樹

昭和48年12月1日の函館市と亀田市が合併して、早50年を迎える。そこで、両市の合併への経緯とその後の変遷を思い起こし、辿ってみたい。

合併に向かう主な要因について考察してみると  
 先ずは、亀田地区への急激な人口流入があり、これに伴うインフラ整備の必要性があったものの、そのスピードに亀田市が十分に対応し切れていない状況にあった。  
 人口増によって義務教育施設の拡充が求められ、さら

には水道水の確保も喫緊の課題であり、水源地は亀田市にあるものの、水道の権限は（赤川水源地、中野ダム）函館市水道局所管であったことから、生活用水の安定的確保は日常生活面で大きな要因であった。

このような背景のなかで、合併に関する反対意見も大きく2つあった。

第1は、元々亀田市の地主さんといえる人達で、合併することで固定資産税が高くなり、税負担が重くなるという理由であった。この論理を紐解くと、合併により市

街化区域になると、農地等についても宅地並みに課税されるのは困ると言うことである。

しかし、市街化区域内の農地が宅地並みの課税になることはなく、合併前と同様の税負担扱いであることは、地方税法でも保証されていた。

第2は、急激に膨張する亀田市の行政要望に対応するため、亀田市は職員数も2カ年ほど約150名の臨時で採用しており、行政の処理能力が、当時の行政サービスの需要に十分対応し切れていない現状であった。

そのような中で亀田市職員組合は、職員年齢も比較的若く、街づくりの意欲も旺盛で将来への希望も大きいものがあり、さらなる発展の可能性を考えると、合併には基本的に反対の立場であった。

亀田市の職員には、函館市の大きなパイに飲み込まれてしまい、身分はもとより将来への昇格等が見込めないのではないかという不安感を持っていた。「亀田のイモ職員」のレッテルを張られるのを危惧していたのも事実である。

私自身は、亀田市に採用されてまだ3年目での合併であり、自分の身分や将来を考慮する年齢でもなく、ひたすら職務を全うすることが自分に与えられた役割だと考えており、将来的なことへの不安はさほど感じていなかった。ただ、合併後函館市の職員と仕事をしたときには、負けられない、軽視されない仕事をするべきであるという思いは強く持っていた。

統計的にみると函館圏の人口重心は、北東部へ移動しつつあり、函館駅、五稜郭から亀田エリアに中心点は近づきつつあった。

また、市域を横断する道道191号(当時)は、湯の川温泉から七重浜に至る約10.2kmの街路で、新たな産業基盤としての役割は主軸になると考えられており、合併前の昭和40年(1965)に整備が始まり想定通り経済・産業・日常生活に至るまで、沿線での商業活動を占めるウエイトはますます高くなっていった。

通称・産業道路と呼ばれ、全国的にも例を見ないほどのロードサイドショップが連なり、ありとあらゆる商品が調達出来るベルト地帯になったが、道路の外側の宅地開発が進んだため、常に交通量が多く慢性的な交通渋滞を引き起こしていた。



建設中の亀田支所、手前は旧亀田市役所を引継いだ庁舎

合併に向かう市民感情は、概ね函館市からの転入者が大半を占めており、転入者の割合が従来からの亀田市民を大きく上回る現状を鑑みると、合併選択の傾向はますます顕著となっていた。このことは、取りも直さず函館市と合併することが、自然の流れであるという意識醸成がなされていたともいえよう。

また、当時の亀田市長は、函館市の教育長経験者であり、トップとしても合併に対する抵抗感は少ないと見るのが妥当であり、将来のことを考えると、亀田市長にとっても合併する方向が、「大函館市形成」の良いチャンスになると思っていたと思慮される。

合併後、亀田市長は函館市長選に挑戦することとなるが、現職に敗れている。

50年経過の中で、亀田市の職員の中から2人の函館市長が誕生しており、人材供給という観点から見ても、当時の亀田市の若い職員の中には、優秀な人材が数多くいたと言っても過言ではないと思っている。

亀田地域は、これまでもこれからも、「道南」、「函館市域」発展の中心的エリアとしての役割を担っていくものと考えており、両市民が望んだ合併は、将来を見据えた正しい選択であったとの結論に達するのではないかと思うところである。



**おうみ しげき** 昭和23年函館(旧亀田市)生まれ。昭和46年日本大学卒業、同年旧亀田町に採用され、函館市福祉部長、企画部長、常勤監査委員を歴任し、平成24年退職、その後、社会福祉法人共愛会常務理事、理事長を務め、令和5年退任



## 亀田中学校の思い出

田島郁夫

私は、現在、江別市に住んでいるが、幼小中高の少年時代を函館市で過ごした。故郷の文化や歴史に触れたくて函館文化会に入会させて頂いた。父の勤務の関係で中学2年生になる時、函館市から当時の亀田郡亀田町に転居し、亀田町立亀田中学校に転校した。私の中学生時代は半世紀以上も前のことになるが、幸いに引越に伴う散逸を免れ、昭和45年（1970）3月発行の亀田中学校生徒会誌「みはら」が手元にあり、中学生時代の記憶がよみがえる当時の記憶をたどりながら、亀田中学校の思い出についてエピソードを交えて綴ってみたいと思う。

亀田中学校の思い出について触れる前に、転校する前の五稜中学校新入生の頃をふり返りたいと思う。父が附属小学校の教員だった関係で、五稜郭町の北海道学芸大学の官舎に住んでいた。家の向かい側には函館商業高校のグラウンド、数分歩けば五稜郭公園があり、オールシーズンの遊び場に恵まれた環境だった。

2年に進級する直前の3月に、父が附属小学校から渡島教育局に異動することになり、家族で亀田町に引っ越すことになったが、転校は青天の霹靂だった。スポーツが好きな私にとって、運動が盛んな五稜中学校から転校することはとても残念で、当時、五稜中学校にはプールがあり、夏休みも通って泳げるようになっていた。

また、中学校創立20周年を記念する市内陸上大会でリレーメンバーの補欠に選ばれ、千代台陸上競技場のトラックを隊列の最後尾で入場行進し、上級生の活躍で男女総合優勝の感動も味わった。

進級したらもっとスポーツにチャレンジしたいと思っていたため、五稜郭町に隣接する亀田町にある亀田中学校が遠い学校に感じた。引越しの日が訪れ、11年間住んだ愛着のある五稜郭町をあとにして、亀田町字富岡に転居することになった。

転校後、運動部に入部したく、放課後にバレーボール部の活動を見学した。バレーコートは四方を木造校舎で

囲まれた中庭にあり、当時は9人制バレーだった。バレー部は活気がありすぐに入部することを決め、学校生活にも馴染むことができた。生徒会誌で、バレー部の監督は「雨がふると泥んこ、夏の陽光にあえば数センチものほこり。まことに「ほこり高き」練習風景である。体育館も立派にでき、十分な設備をもつことのできたことをうれしく思います」と書いている。私が3年の時、バレー部は、亀田第一地区優勝、渡島大会3位と中体連では活躍した。

亀田中学校に転校して、ようやく学校に慣れてきた頃、昭和43年（1968）5月16日、十勝沖地震が発生した。3階の教室から何気なく窓の外を見ていると電柱が揺れているように感じた。その時の校舎が大きく揺れて机の下に身を屈めたことが思い出され、下校後も余震が続き不安な夜を過ごしたことは今も忘れられない。

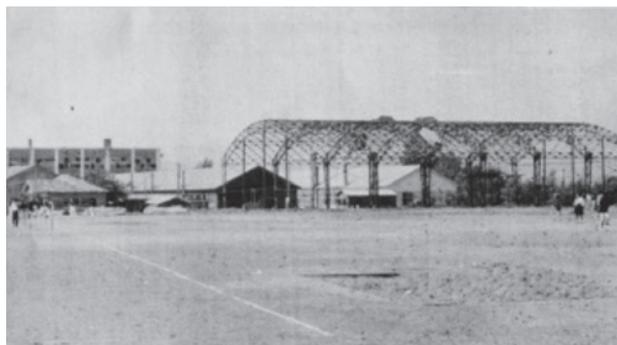
生徒会誌の「あとがき」に、「この6号に掲載の作品は、人類初の月着陸の年、昭和44年（1969）のみなさんの中学校生活の記録ともなります」とあり、アポロ11号が月面着陸を成功させたのは昭和44年（1969）7月20日のことで、私が3年生の時だった。全校生徒が体育館でNHKの衛星生中継をテレビで見たことを覚えている。月面着陸も然る事ながら、当時「NHKラジオ続基礎英語」で英語を学んでいた私にとって、アポロ11号から地球との交信の同時通訳は鮮烈で、同時通訳者の西山千氏と国広正雄氏の名前を覚えた。

卒業してから、校名が2度変わり、亀田の市制施行に伴い、亀田市立亀田中学校と改称、函館市への編入に伴い、函館市立亀田中学校と改称された。

私は函館市立亀田中学校で教育実習生としてお世話になったが、当時は、父が渡島教育局から知内町教育委員会に異動し知内町に転居していたため、実習期間は七飯町の叔母宅に寄留させてもらっていた。実習で亀田中学校の同期生で友人のN君と再会し、凶らずも一緒に教育実習をすることとなり、私は英語教師、N君は社会科教

師志望だった。私たちが在籍していた時も生徒数900人にせまる大規模校で、卒業して数年後の教育実習でお世話になった昭和51年当時には、31学級、生徒数は1,300人を超えるマンモス校になっていた。実習初日の職員室での挨拶は、約50人の先生方を前にしてただただ緊張していたことだけを覚えている。朝の職員の打ち合わせは、1階の職員室で全体の打ち合わせを行い、その後、各学年の職員室に別れて学年の打ち合わせを行っていた。私は現職の頃、最大で21学級規模の中学校2校に勤務したことがあり、それより10学級も多いと思うと、特に修学旅行などの宿泊を伴う行事では、学年400人以上の生徒の団体行動になるわけですから先生方の大変なご苦労があったと思われる。

さて、担当学級の生徒の間では、プラスチックの下敷きをラケット代わりに、教室で卓球が流行っていて、私も昼休みに生徒たちの中にしばしば加わった。ある日熱中し過ぎてチャイムが鳴っているのに途中でやめられず、そこへ担任の先生が現れて子どもたちに次の授業の準備を促すことなく、一緒に遊んでいた私は恥ずかしい思いをしたものだ。毎日子どもたちと楽しく過ごし、ついに実習の成果を試す研究授業の日が訪れ、学級担任の先生の日頃の学級づくりと教科担任の先生のご指導に支えられて、英語のオーラル・ワークでは子どもたちがい



建設中の亀田中学校体育館

つも通り元気よく声を出して私の拙い授業を助けてくれた。後に中学校英語教師として教職に就くことが出来たのも、亀田中学校で教育実習生としてお世話になったお陰です。亀田中学校では、学級担任の長谷川進先生の生徒の心をとらえた温かいご指導を忘れることは出来ない。また、体育の橋田恭一先生には、いつも気さくに声をかけていただき、高校受験のアドバイスも頂戴した。橋田先生の函館文化会会報「巴響」第83号への寄稿文を拝読し、その後、手紙や電話で旧交を温めることができた。



**たじま いくお** 昭和29年茅部郡森町生まれ。上越教育大学大学院学校教育研究科修了。石狩管内中学校8校に勤務。千歳市、江別市の中学校長を経て、北広島市立東部中学校長で定年退職。江別市教育委員会学校教育課指導主事、札幌学院大学教職課程非常勤講師を歴任。



## わが街 亀田・神山

木村 一雄

私は、北海道亀田郡亀田村大字神山で生まれ育ち、最初の本籍がその亀田村だった。

明治35年(1902)、亀田村・神山村・鍛冶村・石川村・桔梗村をもって、二級町村制の『亀田郡亀田村』になり、その後、大正8年(1919)に一級町村制となった。

その間には五稜郭駅の開業あり、その大きな影響を受け、市民団体として亀田村役場内に部落会連合会組織が昭和30年(1955)に設立し、町制施行に向かっていった

と考えている。

昭和37年(1962)には、『亀田町』として施行となり、昭和45年(1970)の国勢調査で5万人となり、昭和46年(1971)市制施行で『亀田市』となった。

その2年後の昭和48年(1973)には、函館市と亀田市が合併し新函館市となりましたが、私は、今でも対等合併であったと勝手に考えている。

私が住み育った神山は、丁目表示になり本籍表示の変

更は五回を数え、現在は住宅街となっている。

子供の頃、親と一緒に函館のデパート等へは、一張羅を着て行ったものだが、しかし、今考えると、家が農家なので、毎日朝早く朝市に行くために函館には行っていたのだと思うと、亀田は田舎だったと感じる。

私が卒業した、

鍛神小学校の校歌は、横津の見える窓のはて ♪♪、

亀田中学校の校歌は、雲光る横津の山嶺 ♪♪

で、亀田からの山は、横津岳がシンボルだったと思う。横津岳を臨みながら四季を感じ、その日の天候を読みとり、農家は田んぼや野菜などに役立てたものと思いを馳せている。

さて、わが街『神山村』は、貞享元年（1684）に南部七戸より来住したのが始まりです。開村時は『上山村』だったが、その後名称が『神山村』になったのは、文久3年（1863）蝦夷東照宮創建の時だと伝え聞いている。

神山には、史跡である四稜郭がある。史跡四稜郭は、明治2年（1869）春、五稜郭の背後を固めるため、洋式台場を急造したものだが、四稜郭は蝶が羽を広げたような形の稜壁で、周囲に土塁と空濠をめぐらし、郭内の四隅に砲座を設けているが、郭内に建物は作られていない。大鳥圭介（反政府陸軍奉行）が設計したのではないかと云われている。

四稜郭築造は、城中から士卒役約200名、神山村を含む部落から人夫約100名。さらに、郭の付近に炊事場を設けて子女を集めて炊事をし、昼夜の区別なく作業をして、数日で作り上げたといわれている。五稜郭戦争・戊辰戦争の最後の砦として戦いが行われた四稜郭、地域にとっては意義深い場所ではないかと考えている。

私が子供の頃、四稜郭はスズラン畑で遊び場や散策の場所でしたが、昭和45年（1970）から3年かけて、復元され、現在は、郭内に先人が残した桜が植栽されており、春の花見時期には綺麗に満開のサクラを咲かせている。また、駐車場スペース脇には、函館市との協働モデル事業として『芝桜』を三年かけて植樹し、四稜郭線道路を走るドライバーを楽しませている。

市民の憩いの場としての公園作り、そして史跡 保存のために神山町会の方々がボランティアで整備、清掃に携わってくれている。私も幼いころからの思い出の地でもあり、先祖が関わった大切な史跡を大切に引き継いで



史跡四稜郭の駐車場脇のサクラと芝桜

いかなければならないと考えている。

他に亀田と言えば、今年の12月で完成100周年を迎える笹流ダムがある。水圧を受ける壁を格子状のコンクリート構造で支えるという日本初のバットレスダムで建造されていて、多くの市民が炊事遠足や散策に利用出来る公園として整備されている。

また、昭和17年（1942）に海岸町埋立地から赤川通りに移転してきた函館海洋気象台、今は函館地方気象台と名前を変えたが幼少期には気象台によく遊びに行っていたことが思い出される。

亀田川を中心とした亀田6か村には、鍛冶村に鍛冶稲荷神社、神山村に神山稲荷神社、赤川村に三島神社、石川村に川上神社、桔梗村に比遅里神社があり、毎年9月各村々でお祭りを行い、亀田八幡宮が最後に例大祭を行っているが、こうした人々の楽しみが、各村・亀田を繁栄させてきたのではないかと考えている。

私が育った街は『亀田』であり、その原点が神山村で、今でも自分は神山から離れられず、函館人ではなく『神山人』と自認している。



**きむら いちお** 昭和30年函館（旧亀田）生まれ。昭和52年函館大学卒業、同年学校法人木村学園函館ひかり幼稚園に事務長として採用、理事長を経て現在学園長理事、また、函館市社会福祉協議会理事、北海道私立幼稚園協会道南支部長など



## 「亀田地区」は縄文時代遺跡群の宝庫

田原良信

私は、函館に住んで約65年ありますが、東浜町（現末広町）で生まれて、弥生小学校、愛宕中学校、函館西高等学校と、一貫して西部地区の中で居住してきた。その後、東京の大学へ進学し、縁あって5年後に帰函した後は東部湯川地区に居住して現在に至っている。振り返ってみれば、小学校から高等学校の期間は「亀田地区」の中で訪れた箇所は小学校の運動会開催場所の五稜郭、炊事遠足の赤川水源地など、極めてピンポイントの場所のみの訪問に限られていました。

ほとんど土地勘もなかった亀田地区が主たる仕事場へ変わったのは、昭和54年（1979）に函館市教育委員会文化財係に勤務し、亀田地区の権現台場遺跡発掘調査担当者の役割が与えられた時だった。昭和50年（1975）の文化財保護法改正により、宅地造成などの開発行為により埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の保存に影響が及ぶ場合には、記録保存の発掘調査が必要とされ、その調査を担当・運営する専門職員が私であり、国の補助事業として発掘調査事業が実施されることになった。

権現台場遺跡は亀田地区の神山町に所在し、元治元年（1864）に竣工した五稜郭の鎮守府として、翌年の慶応元年（1865）に北東側鬼門にあたる上山（神山）の地に、東照権現徳川家康の命日となる4月17日に東照宮を遷宮した由来をもとにしている。権現台場遺跡の名称により、五稜郭・箱館戦争に関係する場所であることは容易に想像できるが、この遺跡の最大の特徴は台地一帯に広がる縄文時代の大規模集落跡が存在していたことにある。

発掘調査の結果、約4,700㎡の台地上には縄文時代中期中頃から中期後半頃（約4,500～4,200年前）を中心とする竪穴（たてあな）住居跡が30箇所以上発見されるなど、青森・秋田・岩手県など東北地方北部に広がる円筒土器文化圏の一翼を担っていた遺跡群が存在していた可能性が高まった。また、権現台場遺跡と同一丘陵上部の約1km先には、箱館戦争時に築造された史跡四稜郭が存在し、その隣接地には明らかに縄文時代中期頃を中心と

する集落跡が存在する可能性が高いことが確認された。

この台地は、亀田川水系に延長する河岸段丘であり、河川敷に面する緩斜面地の広がり、縄文人が住居を造り、生活を営む上で格好の最適地であったことを物語っている。

昭和61年（1986）、権現台場遺跡から北東側約1km先にあたる陣川町の段丘上における大規模宅地開発予定地で、埋蔵文化財包蔵地確認調査が行われた結果、縄文時代の大規模集落跡が存在する遺跡である可能性が高いことがわかった。陣川町遺跡と命名されたこの遺跡は、函館市内を一望できる標高90m、広さ約20,000㎡におよぶ大規模なもので、急遽、翌年度に権現台場遺跡と同様に、国庫補助事業として約14,000㎡を超える緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査の結果、縄文時代中期後半から中期末頃の竪穴住居跡が110箇所以上発見され、中でも竪穴住居跡の長さが10mを超える大型のものが複数確認されたことや、標高の高い場所に大型竪穴住居跡が集中分布するなど、縄文時代大集落跡遺跡の全体像を明らかにできることとなる貴重なデータを得ることができた。このように、亀田地区の亀田川水系での約3年にわたる権現台場遺跡と陣川町遺跡の発掘調査の体験は、最も印象深い出来事となった。

最後に、亀田地区の中でも特筆される縄文時代の大規模遺跡「サイベ沢遺跡」の現状と今後の望ましい方向性について、提案する。

亀田地区北西側の桔梗町、西桔梗町の標高20～30mの緩やかな台地北側を常盤川水系の小河川となるサイベ川が流れ、台地の上には古くから知られる縄文時代の大規模遺跡である「サイベ沢遺跡」が存在している。この遺跡の範囲は、東西約800m、南北約250mで、全体面積が約200,000㎡におよぶ広大なもので、縄文時代前期から中期を中心とする大規模集落跡が形成されていた可能性が高いと考えられている。

サイベ沢遺跡の内容が知られようになったのは、昭和

24年（1949）市立函館博物館が提唱して、5月から7月の期間に函館市内の中学・高校生を中心とする多数の参加者による発掘調査が実施され、遺跡の内容が明らかにされた時からとなる。台地北側崖面に東西15m、南北5mのトレンチを設定し、第1層から第25層におよぶ土層堆積を観察して、円筒下層式土器文化の4つの文化層と、円筒上層式土器文化の3つの文化層と合計7つの文化層に区分し、円筒式土器の編年が確立されている。さらには、昭和40年（1965）、昭和59年（1984）、昭和60年（1985）、平成6年（1994）には小規模な緊急発掘調査、昭和46年（1971）には広範囲にわたる遺物分布調査が行われ、サイベ沢遺跡の規模や内容、価値観等が一層高まることとなった。

サイベ沢遺跡は東北地方北部から津軽海峡を越え、北海道南部を中心に広がる円筒土器文化に属し、青森市の三内丸山遺跡と同様に一大拠点的な大集落跡の可能性が高いと考えられる。かつて、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界文化遺産登録する以前の国内選考の段階で、国の史跡指定が必要最低条件とされる中、サイベ沢遺跡は埋蔵文化財包蔵地登録のままであったことから、候補物



陣川町遺跡の竪穴住居跡全景

件のリスト入りは困難な状況にあった。今後、行政と民間が協働する中で国の史跡指定を得て、サイベ沢遺跡の保存活用が進められて行くことを期待している。



**たはら よしのぶ** 昭和27年函館生まれ。昭和50年駒澤大学文学部歴史学科卒業。昭和54年函館市教育委員会に学芸員として勤務、教育委員会文化財課長、市立函館博物館長で定年退職、その後箱館奉行所館長を努め平成28年退職。



## Oh! My Sweet Road 産業道路

木村 拓美

函館市民なら誰もが知っている産業道路（正式名称は北海道道100号函館上磯線というらしいが…）は、湯倉神社前から亀田支所を通り北斗市の大野新道との交差点までの片側2車線の道路区間で、何時の頃から産業道路と呼ぶようになったかは定かではではない。

そもそも「産業道路」とは主に貨物輸送の交通に供される我が国での道路の通称であり、全国各地にも通称産業道路と呼ばれている道路が存在していることを知ったのは社会人になって旅行や出張で他都市を訪れるようになってからである（インターネットで調べてみると函館以外に釧路市～標津町間の国道272号を始め、宮城県道23号仙台塩釜線など全国にはなんと50本以上も存在して

いる）。生まれも育ちも亀田の私にとって、産業道路と言えば函館の市街地を東西に横断するこの道路しか存在していなかったのである。

昭和27年に亀田郡亀田村字中道（現在の鍛神小学校の隣）で生を受け、この70年間ほぼ生地に近い場所で暮らしてきた私にとって、人生のほとんどは産業道路とともに過ごしてきたことになる。

この産業道路の基を作ったのは昭和22年に亀田村村長となった佐々木善松氏で、当時函館と亀田をつなぐ道路は、国道と赤川線、鍛治中道線の3本しかなく、これらを横につないで湯の川に抜ける道がなかったことから、佐々木村長は地主から寄付を求めたり、用地を買収した

りして、幅八間の道路をつくり、その後道路を北海道に寄付するから工事は北海道でやってくれと土木現業所に足を運んで実現したと函館市史に記されている。

もう一つおまけの史実としては、私が卒業した亀田中学校は飛行場跡地に建てられた学校でその滑走路が産業道路の一部になっていることも同窓生の一人として記憶している。

その後寄付を受けた北海道は昭和32年に道道191号上磯亀田湯川線と認定したものの未舗装道路のままで、現在の産業道路は昭和40年に着工され昭和53年9月に全線開通していると史実にある。余談になるが、私の父は戦地から戻ってきた後函館土木現業所に勤務して、ちょうどこの産業道路の造成に携わっていたこともあり、酒が入るとよくこの産業道路は自分が作ったと自慢していたものである。

私が小学生時分は産業道路とも呼ばれることもなく、馬車道のような農道で道路脇の畑や水田とともに近所の悪ガキどもの遊び場所でもあった。産業道路と一般的に呼ばれるようになったのは、私が中学生となった昭和40年以降で亀田中学校への砂利道の通学路になり、高校生の時はラ・サール高校への通学路となって片道4km程の土埃が舞う中を自転車通っていたのである。大学進学で函館を離れていた昭和48年12月に亀田市が函館市に編入合併され、大学4年間は休みで帰省するたびに少しずつ舗装されて綺麗になっていく産業道路や周辺環境の変化に目を見張らされたものであった。昭和50年大学を卒業して運良く函館市役所に奉職することができ、最初の勤務地が亀田支所となったためその後4年半は自動車での通勤道路にもなったのであった。

昭和53年に産業道路が全線開通し4車線の舗装道路になると、モータリゼーションの急激な進展とともに道路沿線も著しく発展を遂げていくのであるが、特に私のよく知る亀田支所を中心とした赤川通地区は目まぐるしい発展を遂げていく。それは昭和55年(1980)8月に長崎屋が、9月にはイトーヨーカドー函館店と相次いで大規模駐車場を完備した商業施設が開店したことで、それまでの商業地図が大きく塗り替わったのである。残念ながら、長崎屋函館店は平成21年(2009)に閉店し、MEGAドン・キホーテ函館店へと業態転換し、さらには昨年の7



亀田市合併当時の美原十字街商店街

月にはイトーヨーカドー函館店も閉店してしまい、一年後の今でもその跡施設の利用策が決まっておらず、今後この商業地図もどのように変化していくのかが大いに注目される場所である。

また、この産業道路は平成の時代に入ると特に朝夕の交通量が増え、交通渋滞をしばしば引き起こして、住民生活に支障をきたすようになっていた。特に冬季間は車が数珠つなぎとなって、緊急車両が通行できず人命に係わるような場合も多くみられるようになっていた。このような背景から函館新外環状道路(空港道路)が平成19年度に事業化となり平成27年に函館IC～赤川IC間が、そして令和3年(2021)3月には赤川IC～函館空港間が供用開始されたことにより、産業道路の渋滞緩和はもとより周辺道路の交通量も減少してきていて、地域交通の安心安全にも繋がっている。

この産業道路は地域の発展に無くてはならない重要な道路として戦後から昭和～平成～令和と時代を歩んできたのだが、今や生活道路として地域住民に欠かすことのできないものとなっている。それだけにもう産業道路という貨物輸送時代に拝した名称から脱却して今に相応しい別な呼称を使用するようになってもと考えられる反面、今や市民の誰もが呼び馴染んでいる「産業道路」がこれからも市民の記憶と心の中に生き続けていってほしいものだとは願っている。

最後に笑い話になってしまうが、1970年にラジオで聴いたジョージ・ハリソンの曲「マイ・スイート・ロード(My Sweet Load)」が私にはとても耳触りが良く気に

入ってよく聴いていたのだが、この曲の「Lord(神)」を「Road(道路)」と勘違いして解釈して聴いていたばかりに、今でも私の人生にいつも寄り添ってきた 産業道路を「My Sweet Road」であると勝手に思い続けているのである。



## 赤川 むかし語り

～ ファミリーヒストリーによせて ～

山田 雄一

函館市亀田地区は、函館市と合併前は亀田市（昭和46年）、その前は亀田町（昭和37年）、亀田村（明治35年）。さらに遡ると亀田村、鍛冶村、神山村、赤川村、桔梗村、石川村の6村だった。

私の母方の実家「成田家」は赤川の三嶋神社の隣にあり（現在のはこだて未来大学の下あたり）、バス道路（道道 函館・赤川線）の反対側には函館市水道局の高区浄水場があり、山の向こうにある笹流ダムとその保安林まで含めると広大な土地が当時の亀田村内にもかかわらず函館市の土地という、函館市赤川村のようなところだった。小学校6年生まで私もここで育ったが、今では立入禁止となっている高区浄水場の構内は、近所の子供たちのあそび場で、古くて使っていない真っ暗な浄水場の中に入ったり、少し線路が残っていたトロックに乗ったり、川を石でせき止めて泳いだり、木に登ってセミを採ったり、沢でザリガニを採ったりしていたものだ。

その後、大学生のころから実家近くの函館市赤川町に戻り、ずっと住まいしている。

ここからは、母方の祖父 成田市太郎とその家族のファミリーヒストリーです。祖父は明治31年生まれで赤川に住み、函館市地蔵町で函館ドックの下請けの溶接の会社を興したり、赤川で日魯漁業に北洋漁業で使う竹製の「カニかご」を作って納めたり、農業や種苗業をやったりと面白い人だった。亀田村時代には亀田村議会議員になり、戦時中は赤川小学校で代用教員を務め、その後も村議となり通算3期務め、晩年の亀田町、亀田市となった頃には、亀田市と函館市の合併期成会の亀田側の

◆  
きむら たくみ 昭和27年函館（旧亀田）生まれ。昭和50年函館市に奉職、亀田支所を皮切りに、市民部、会計課、企画部、教育委員会、総務部、議会事務局などに配属され、平成24年港湾空港部にて定年退職。現在、民間コンサル会社で嘱託勤務

期成会長となり、両市の合併に尽力した。

祖父は、私の母（大正14年生、現在98歳）など子供の教育にも熱心な人で、母の姉と母は、赤川から歩いて万代町のガス会社まで行き（約8 km徒歩で1時間半）電車で、函館元町の庁立高女まで通っていた。冬の通学は大変で、猛吹雪の日、姉（大正11生）は赤川の神社のあたりの自宅から雪を漕いで、当時あった函館市立康生病院の所（現在のUR団地・赤川郵便局あたり）まで来た時に、そこの院長に呼び止められ「このまま行くと死んでしまうから帰りなさい」と言われて戻ったという逸話も残っている。母の頃にはバスも開通したと言いますが、便数も少なく、冬は吹雪によってバスは立ち往生して止まることが多く、そもそも冬は運休の年もあったという。戦時中には今で言う歩け歩け運動みたいのがあって、赤川から歩いてやっとガス会社から電車に乗れたのに、学生だけ地蔵町で降ろされ、また歩いて丸井の坂を登って登校していた。母は赤川通りにあった函館海洋气象台（現函館地方气象台）に就職し、戦時中には暗号で送られてくる各地の気象情報を、乱数表を使って解読していた。戦争末期にはその气象台の裏あたりで、陸軍の「赤川飛行場」が造られて近隣の民間人も駆り出されて工事が進められたが、完成の頃終戦になり、日本の飛行機は飛ぶことはなかった

冒頭でもふれたが、赤川は農業や他の産業もあったが、函館の水道の町でもあった。古い時代にはアイヌ語で「ワッカベツ」と呼ばれ「飲み水に適した川」というくらいで、明治22年（1889）に函館の上水道が開通、大正12年（1923）に笹流ダム、昭和35年（1960）に中野ダム

と、浄水場などの施設が次々と出来てそこで働く人も多くなっていた。亀田村～町～市でありながら函館市とのかかわりが多く函館市赤川町という感じで、その為なのか路線バスは、函館バスはもちろん、函館市内のみは必ずの函館市営バスも運行していた時期（昭和32～46年）もあった。そのバスも戦時中は、後部に窯を積んだ「木炭バス」だった。

昭和9年（1934）の函館大火の時には、赤川から函館の空が赤く染まっているのが見えたといい、心配して起きてみると、栄町に住んでいた親戚の一家が子連れで夜通し歩いて避難して来た。そして次の日、焼け跡を見に行くと一面焼けただれ、新川の橋が落ち、多くの方がなくなっている姿を見、家も無くなっており、再建までの間しばらくは、当時「じょうぐら」といわれた別棟で避難生活を送っていた。

亀田の消防も応援に出動して三日三晩、大森浜の犠牲者の収容や物資の運搬などを行った。

戦後、亀田村では村内4小学校に併設されていた中学校を、一校に統合して「亀田中学校」を造ることになり、戦時中に造られ使われなかった「軍用赤川飛行場」の広大な土地の一部を充てることにした。当時の「進駐軍」の許可も得て昭和23年（1948）雪の消えるのを待って3月末着工。校長も決まり工事も進んだ頃、進駐軍に呼び出され在函の憲兵大尉と札幌から来た少佐に「なぜ占領している飛行場の真ん中に学校を建てたか、無断で建築した理由を述べよ」と詰問され、工事中止命令となった。後日判明したことは、一度は正式に許可が下りて公文書にもなっていたが、函館飛行場と称していたため進駐軍から函館市に口頭で、開放を見合わせる旨の連絡があったが、それが渡島支庁・亀田村に伝わっていなかった手違いから大事件に発展したという。その後、許可が下り11月3日文化の日に待望の開校式が行われた。飾る万国旗がなかったので、气象台から信号旗を借り、軒の煙突に結んだロープに掲げ、関係者や生徒たちは大喜びだったという。

（ここからは、改めて赤川の歴史を紐解いてみます。

赤川町誌などによると）

赤川の奥 赤沼には日鉄の赤沼鉱山があって褐鉄鉱を露天掘りしていた。昭和19年（1944）春から操業～一時



農耕馬による竹籠の出荷

終戦で休業したが再開～昭和32年（1957）閉山、階段式露天掘りで、鉱山事務所と社員住宅は現在のダム公園あたりにあり、従業員や家族も含める最盛期には100名ほどの集落となり、その子供たちで赤川小学校の児童は20～30人ほど増えたと言われている。赤川線のバスも延長され現在のダム公園あたりに「鉱山事務所前」となった。

赤川の農家は、野菜などを馬車や冬は馬そりに積んで、赤川から市場に商いに行き、馬車の御者は仕事終わりに酒を飲み、馬車を走らせて寝てしまっても、馬は利口で勝手に来た道を覚えていて、人や物を避けながら家に帰りついた。その後は、オート三輪からトラックになっていく。

亀田の小学校には「学校林」があり、私（昭和26年生）の通った赤川小学校にもありました。冬になる前の季節になると、高学年の生徒はみんなで笹流ダムの奥の山へ行き学校林の小枝を集め、縄で縛り背中にしよって列を作って学校に帰ってきて物置に収めます。冬の間、教室の石炭ダルマストーブの焚き付けに、その小枝は使われる。新聞紙を丸めて火をつけて、焚き付けの小枝をくべて石炭が燃え上がっていき、ストーブで教室が温かくなったものだ。

その赤川小学校も人口減で統廃合の話も聞こえてきます。「私のふるさと赤川」いつまでも函館市民の憩いの場であってほしいと願っている。



やまだ ゆういち 昭和26年函館（旧亀田）生まれ。函館商業高校、函館大学卒業し、昭和49年 東栄（株）入社。令和4年退社し、現在、「NP0箱館写真の会」会員。

## 原稿募集!! 郷土の歴史と文化を語り継ぐ・次回のテーマは“湯川界限”

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に因み、会報で毎号函館の歴史・文化をテーマとして取り上げ、会員皆さんからテーマに沿った思いやエピソードを綴っていただき、後世に残していきたいと考えております。

9回目を迎える次回の特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」のテーマは、“湯川界限”としました。

北海道三大温泉の一つである湯の川温泉を持つ、函館の奥座敷として発展した“湯川界限”。湯の川温泉は戊辰戦争時には幕末の戦士が傷を癒したという歴史もあり、住宅街に佇む温泉街は明治・大正ロマンの漂うノスタルジックな雰囲気が魅力ともいわれています。観光客ばかりではなく市民も、路面電車で気軽に出掛け温泉街をぶらりと歩き、歴史スポットを巡ね津軽海峡や松倉川の風情を楽しんでいる姿も見受けられます。

そんな“湯川界限”にまつわる、会員皆さんの思い出やエピソード、想いなどを次の応募規定によりお寄せください。お待ちしております。



街角で気軽に温泉気分を味わえる「足湯」

### 【応募規定】

- 1 “湯川界限”にまつわる思いやエピソード
- 2 文章は原稿用紙6枚程度(2,400字)で、関係する写真1枚の掲載も可能  
なお、原稿には趣旨を損ねない程度に手を加えることがあります。
- 3 原稿は、封書、FAX、メール等で令和6年7月31日(水)までに函館文化会へ送付ください。
- 4 出来れば、これまでに寄稿されていない会員の応募をお願いします。
- 5 原稿の送付先、問い合わせは  
函館文化会事務局 TEL・FAX 0138-57-1175 E-mail bunkakai@host.or.jp



## 令和5年 神山茂賞は、中尾仁彦さんに



郷土史研究に貢献した個人・団体を顕彰する神山茂賞、令和5年は「箱館歴史散歩の会」を主宰する中尾仁彦氏に贈呈します。

中尾氏は、平成20年に「箱館歴史散歩の会」を設立し、函館西部地区を始め市内各所を市民と共に歩きながら郷土の歴史や文化を学び伝承する活動を継続されております。また、近年はSNSを活用し、まち歩きで訪れる箇所を事前に資料で解説、開催後はまち歩きの様子を動画で紹介しております。

こうした長年にわたる郷土の歴史や文化を後世に伝える活動を継続し、新たな情報発信の手法を用いて市民に地域の歴史や文化に触れることを可能にしたことが高く評価されたものであります。

なお、贈呈式は11月7日(火)、函館国際ホテルで行います。

## 特別寄稿

## 函館に現存する三つの「常盤」

～常盤坂・ときわ通・常盤川～

古野 柳太郎



はじめに地名に「おめでたい言葉」が全国至る所でたくさん使われています。ご多分に漏れ

ず函館でも、例えば、千歳、蓬莱（宝来）、末広、弥生、万代、宝、常盤、高砂などです。そこで、今回は「常盤（ときわ）」を取り上げてみた。

地域名（町名、字名）に「常盤」が使われているところは、道内の市町村で11市、12町、2村あります。函館はどうでしょう。現在は町名こそありませんが、坂道、通り、河川の形態で現存している。

## 1 「常盤坂」

「常盤坂」は、西部地区で大町電停のすぐ西側にある坂道で、坂の上は船見町で坂の下は弥生町。

函館のルーツは西部地区であるが、平地が少なく、函館山の山麓傾斜地を利用して市街地が形成され、まちの発展と共に道路や民家、事業所、店舗、公共物、学校、寺院など、大小様々な建造物が造られていった。

「常盤町」の町名は、江戸から明治期に数回分合が繰り返された。河川が無く水利もよくないこの地域は、度々大火に見舞われ、復興を契機に市街地整備も実施された。明治12年7月の郡区編成法実施の際にも町の分合が行われました。常盤町は3分割され、旅籠町、天神町、船見町に組み込まれた。

その後、常盤町の町名が消滅し、坂名「常盤坂」のみ継続して残されている。傾斜地に建設用地・道路・斜路・排水溝等の造成に安山岩が用いられたが、函館山東端の立待岬と西端の山背泊に安山岩の大規模な露頭があ



常盤坂

り、石材切り出しが容易だったことにある。加工すると石肌も滑らかになり、それでいて丈夫で磨滅や劣化に強い石材で、石切場が近いことも好条件であり、さらに近郊からも搬入された。安政期、江戸お台場築造後、箱館の五稜郭と弁天台場を築造し、この地に残った石工達の知恵と技術が、市街地造成に発揮され、今でも西部地区一帯に優れた石積、石垣を多く見ることができる。

## 2 「ときわ通」

初めに函館市立中学校創設時に触れておくと、昭和15年船見町に設立され、昭和18年現在地（柳町）に移転した。その際、函館で酒類雑貨商を営み、一代で財を築いた梅津福次郎（安政5年～昭和17年、）の多額の寄付により広大な敷地に校舎が新築された。後に同窓会が中心となり、校地内に梅津福次郎記念公園と常盤木（常緑樹で大変めでたい木）記念林を設けた。

校舎に続くこの通りは市道五稜郭68号線で、通りの名称は前述から「ときわ通」と命名された。

現在の市立函館高校（元函館市立中学校・前函館東高校）正門前・市道松見通交差点から始まり、芸術ホール・道立美術館（元函館商業学校）前を通り西方向へ。道道赤川函館線交差点を通り白鳥橋を渡り、道教育大函館校の学生寮（桐花寮）前から市道八幡通交差点を通り八幡小学校グラウンド横をさらに西方向へ。この界限は大学や学生に係る店舗や下宿・アパートなどの建物が多く、パソコン、通信機器、自転車販売、古書店、コンビニなども近くに営業している。この通りを進むと国道5号、JR函館線亀田町踏切、国道227号と交差し、臨港



ときわ通

地域の市道へつながる。浅野町函東工業(株)前の市道T字交差路が、「ときわ通」の終点。

### 3 「常盤川」

「常盤川」は、亀田市が合併してから知られるようになった2級河川で、亀田中野の丘陵地を水源とし、函館ICループ橋下を流れる小川である。北海道工業技術センター前の市道に沿って南下し、途中、桔梗川中通りではほぼ直角にカーブし、国道5号とJR函館線の下を流れている。昭和50年に函館市は西桔梗町に大規模な流通センターと軽工業団地を造成した。その際に河川切替えが行なわれ、常盤川は造成地の北縁から西縁に沿って流路が変更され、産業道路(道道100号)の下を流れ、さら



常盤川

に南下して函館市と北斗市の境を流れるが、兩岸の土手部分が牧草に覆われている。この牧草は、通称お化けトンネル(JR五稜郭機関区連絡通路)近くの祭事用飼育馬の飼料に供されている。函館湾浄化センター北側で石川と合流し、道南いさりび鉄道・大野新道・国道227号の下を流れ、津軽海峡フェリー埠頭北側から函館湾に注がれている。

川の長さは6.8kmですが、この川に架かる橋のうち、「常盤」名がつくものが、上常盤橋、常盤橋(※上流)、下常盤橋、上常盤川橋、下常盤川橋、常盤川橋、常盤橋(※下流)と7橋あります。

#### おわりに

「常盤坂」のルーツは、常盤町の町名に由来しているが、「ときわ通」は、函館市立中学校移転後に植えられた常盤木記念林に由来しており、また、「常盤川」は、江戸時代にこの辺りに常盤木が多く植え付けられたことに由来している。それぞれ地域が離れており、相互関連はないがその地域の人々の願いと歴史が「常盤」を育んだのかもしれない。



ふるの りゅうたろう 昭和12年函館市生まれ。北海道学芸大学函館分校卒業。室蘭市、函館市、八雲町など2市4町10小・中学校に勤務し、平成10年定年退職

## 函館文化会への図書等の寄贈

会報「巴響」第84号の発行(令和4年10月)以降、函館文化会に次の図書の寄贈がありました。寄贈いただきました皆様に感謝申し上げます。なお、図書等は函館文化会に大切に保存しておりますので、閲覧を希望される方は申し出下さい。

- ・箱館戦争 新・戦没者名簿 (著者 木村裕俊)
- ・造船現場から見た「港はこだて史」全4冊 (著者 新城光正)
- ・「温故知新」(毎月) (発行 七飯町郷土史研究会)
- ・「小さな親切 第85号」 (発行 「小さな親切」運動 函館支部)
- ・「翔たけ 第31号」 (一般社団法人小笠原アカデミー教育振興財団)
- ・「深瀬鴻堂の妻 タカの生涯」 (著者 羽場 静子)
- ・「函館大正史 郷土/新聞 資料集 ほか53冊 (故 叶邦武氏 蔵書 贈呈者 叶 加奈子)
- ・「開国の先駆者たち 象山・松陰・聖謨・小楠」 (著者 土谷 精作)
- ・「縄文の世界はおもしろい」 (著者 土谷 精作)
- ・「函館大学論究 第54輯第1号・2号」 (発行 学校法人野又学園 函館大学)
- ・「日本文学文化 第22号」 (発行 東洋大学日本文学文化学会)
- ・「H I (HAIKU INTERNATIONAL) NO. 159」 (発行 国際俳句協会)
- ・「日刊政経 2023年・新年特集号、夏季特集号」 (発行 日刊政経情報社)
- ・「函館市民文芸 第62集」 (発行 函館市中央図書館)
- ・「東北アジア海域文化の異同と流動」 (発行 東北亜細亜文化学会)
- ・「北海道青少年叢書(四十一) 北国に光を掲げた人」 (発行 公益財団法人北海道科学文化協会)
- ・貨幣が語る ジョチ・ウルス (著者 安木新一郎)
- ・道南の人・唄・風土～語り継ぎたい在郷魂～ (著者 館 和夫)
- ・方言漢字辞典 (編著 笹原宏之)

## 会務報告

# 令和4年度 函館文化会 事業報告及び収支決算

5月29日に開催された令和5年度定時総会において、令和4年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見、ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

## 令和4年度 事業報告

### 1 郷土史研究者奨励事業を通じ郷土の文化を掲揚し、その振興を図るため、次の事業を実施した

- (1) 「神山茂賞」贈呈式の開催（定款第4条第1号に掲げる事業）
  - ・日時 11月7日（月）午後4時30分
  - ・会場 函館国際ホテル
  - ・受賞者 神山茂賞 木村 裕俊 氏  
神山茂奨励賞 新城 光正 氏  
贈呈式後、受賞記念講演及び受賞者を囲み祝賀会を開催
  - ・受賞記念講演  
木村 裕俊 氏  
演題：「箱館戦争 新・戦没者名簿」について  
新城 光正 氏  
演題：造船現場から見た「港はこたて史」の世界
- (2) 講演会の開催（定款第4条第2号に掲げる事業）
  - ・日時 10月15日（土）午後1時30分
  - ・会場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
  - ・演題 日本最初の気象観測所・函館  
～気象台150年の歴史とこれから～
  - ・講師 橋本 勲 氏（気象庁函館地方気象台長）
- (3) 第9回「市民公開講座」の開催（定款第4条第2号に掲げる事業）
  - ・日時 8月23日（火）午後1時30分
  - ・会場 函館大学
  - ・演題 市電のルーツ・函館馬車鉄道物語
  - ・講師 増井 慎吾 氏（グレイスマodel代表、元東武鉄道（株）社員）
- (4) 第10回「市民公開講座」の開催（定款第4条第2号に掲げる事業）
  - ・日時 令和5年3月17日（金）午後1時30分
  - ・会場 函館市消防本部 防災多目的ホール
  - ・演題 テーマ「大火に学ぶ函館の街づくり」
  - ・講師 山内 一男 氏  
（㈱建築企画山内事務所代表取締役）  
花巻 英典 氏  
（函館市消防本部予防課長）
- (5) 第17回「卓話」の開催（定款第4条第2号に掲げる事業）
  - ・日時 5月27日（金）定時総会終了後
  - ・会場 フォーポイントバイシェラトン函館
  - ・演題 創作紙芝居「初代わたなべ熊四郎物語」

・講師 今泉 香織 氏

（合資会社 水引アート工房 清雅舎代表）

※総会参加者に市立函館博物館郷土資料館特別入場券を配布

- (6) 会報の発行（定款第4条第3号に掲げる事業）  
会報「巴響」第84号を10月1日発行

### 2 郷土文化振興のため、文化団体等が実施する事業を後援し、或いは助成した

- (1) 後援事業（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）
  - \* 函館邦楽舞踏協会創立75周年記念講演「日本舞踏の会」6月12日
  - \* 函館朗読紀行 vol.16 『映画と文学 佐藤泰志の映画化5作品を詠む』朗読会  
函館朗読奉仕会 7月21日
  - \* 第20回青春海峡文学賞  
北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部  
8月27日
  - \* 第66回北海道奎星会書道展覧会  
北海道奎星会 9月8日～9月13日
  - \* 「北海道観光50年の軌跡」発行記念フォーラム  
一般財団法人 北海道開発協会 9月29日
  - \* 第98回赤光社公募美術展  
赤光社美術協会 10月13日～10月18日
  - \* 「古典の日」朗読会紫式部作「源氏物語」朗読会  
函館朗読奉仕会 11月1日
  - \* 第47回「小さな親切」作文コンクール  
「小さな親切」運動函館支部 12月15日

以上 8事業
- (2) 協賛・助成事業（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）
  - \* 函館邦楽舞踏協会創立75周年記念講演「日本舞踏の会」
  - \* 函館朗読紀行 『映画と文学 佐藤泰志の映画化5作品を詠む』朗読会
  - \* 第20回青春海峡文学賞
  - \* 第66回北海道奎星会書道展覧会
  - \* 第98回赤光社公募美術展
  - \* 第47回「小さな親切」作文コンクール

以上 6事業

### 3 会議

- (1) 総会

- ア 定時総会 5月27日(金)  
 於：フォーポイントバイシェラトン函館  
 (議題)  
 (ア) 議案  
 ・令和3年度事業報告について 承認  
 ・令和3年度収支決算及び監査報告について 承認  
 ・役員(理事・監事)の選任について 選任  
 (イ) 報告  
 ・令和3年度収支補正予算について 了承  
 ・令和4年度事業計画について 了承  
 ・令和4年度収支予算について 了承  
 ・「講演会」の開催について 了承

## (2) 理事会

- ア 第1回理事会 5月27日(金)  
 於：フォーポイントバイシェラトン函館  
 (議題)  
 (ア) 協議事項  
 ・令和4年度定時総会提出議案について 承認  
 ・任期満了に伴う役員(理事・監事)の選任について 承認  
 ・会員の異動(入会・退会)について 承認

- イ 第2回理事会 5月27日(金)  
 於：フォーポイントバイシェラトン函館  
 (議題)  
 (ア) 協議事項  
 ・会長、副会長、常務理事の互選について 承認  
 ・顧問の選任について 承認  
 ・企画委員会委員の選任について 承認  
 ・神山茂賞選考委員会委員の函館文化会推薦委員の選任について 承認  
 ・函館市文化団体協議会理事の推薦について 承認

- (イ) 報告  
 ・今後の日程について 了承

- ウ 第3回理事会 9月30日(木)  
 於：函館大学 会議室  
 (議題)  
 (ア) 協議事項  
 ・令和4年「神山茂賞」について 承認  
 ・会員の異動(入会)について 承認  
 (イ) 報告  
 ・企画委員会委員の選任について 了承  
 ・講演会の開催について 了承  
 ・会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告について 了承  
 ・今後の日程について 了承

- エ 第4回理事会 令和5年1月27日(金)  
 於：函館大学 会議室  
 (議題)

- (ア) 報告  
 ・令和4年度 事業実施状況及び予算執行状況について 了承  
 ・令和4年度 市民公開講座の開催について 了承

- (イ) 協議事項  
 ・令和5年度 実施事業について 承認  
 ・会員の異動(入会)について 承認

オ 第5回理事会 令和5年3月27日(月)

- 於：函館国際ホテル  
 (議題)  
 (ア) 協議事項  
 ・令和4年度収支補正予算(案)について 承認

- ・函館文化会 創立150年記念事業積立金要領の制定について 承認  
 ・令和5年度実施事業(案)について 承認  
 ・令和5年度収支予算(案)について 承認  
 ・会員の異動(入会・退会)について 承認

- (イ) 報告  
 ・会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告について 了承  
 ・今後の日程について 了承

## (3) 諸会議

- ア 神山茂賞選考委員会  
 令和4年神山茂賞受賞候補者として複数件の推薦があり、6月7日(金)及び8月30日(木)に選考委員会を開催、慎重な審議の結果「神山茂賞」に木村裕俊氏を、「神山茂奨励賞」に新城光正氏をそれぞれ受賞候補者として答申した。

- イ 企画委員会  
 函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで12回(持ち回り委員会を含む)で、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。

- ・函館文化会の実施する事業の企画・立案・策定  
 ・講演会、市民公開講座、卓話の講師・演題等の協議及び運営  
 ・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

## 4 その他

- (1) 函館文化会ホームページの運営  
 函館文化会の知名度の向上と事業活動推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び開催、報告などの情報インターネットを通じて会員はもとより全国・世界に発信することを目的に平成29年4月1日に函館文化会ホームページを開設し、運営を行っている。(アドレス、<http://hakodate-bunkakai.com/>)

## 令和4年度 函館文化会 収支計算書

(単位：円)

科 目	予算現額	決算額	対予算比	備 考	科 目	予算現額	決算額	対予算比	備 考
I 事業活動収支の部					(3) 法人税、住民税及び事業税	487,000	486,700	300	
1 事業活動収入					法人税、住民税及び事業税	487,000	486,700	300	
基本財産運用収入	5,040,000	5,055,600	△ 15,600		事業活動支出計	5,665,000	5,662,724	2,276	
会費収入	306,000	308,000	△ 2,000		事業活動収支差額	△307,000	△286,677	△ 20,323	
雑収入	12,000	12,447	△ 447		II 投資活動収支の部				
事業活動収入計	5,358,000	5,376,047	△ 18,047		1 投資活動収入				
2 事業活動支出					特定預金取崩収入	400,000	400,000	0	
(1) 事業費支出	3,540,000	3,540,674	△ 674		神山茂顕彰積立金取崩収入	300,000	300,000	0	
① 文化振興事業	2,867,000	2,866,918	82		事業運営調整資金積立金取崩収入	100,000	100,000	0	
事務手当	1,374,000	1,374,000	0		特定預金借受収入	200,000	200,000	0	
顕彰費	150,000	150,000	0		事業運営調整資金積立金借受収入	200,000	200,000	0	
会議費	320,000	320,034	△ 34		投資活動収入計	600,000	600,000	0	
旅費交通費	143,000	139,640	3,360		2 投資活動支出				
通信運搬費	141,000	141,323	△ 323		特定預金繰入支出	300,000	300,000	0	
消耗品費	69,000	70,088	△ 1,088		事業運営調整資金積立金繰入支出	200,000	200,000	0	
印刷製本費	307,000	306,940	60		創立150年記念事業積立金繰入支出	100,000	100,000	0	
委託料	20,000	20,000	0		特定預金返済支出	200,000	200,000	0	
賃借料	51,000	50,760	240		事業運営調整資金積立金返済支出	200,000	200,000	0	
諸謝金	152,000	152,507	△ 507		投資活動支出計	500,000	500,000	0	
助成金	60,000	60,000	0		投資活動収支差額	100,000	100,000	0	
負担金	74,000	74,200	△ 200		当期収支差額	△207,000	△186,677	△ 20,323	
雑費	6,000	7,426	△ 1,426		前期繰越収支差額	500,000	500,423	△ 423	
② 土地賃貸事業	673,000	673,756	△ 756		次期繰越収支差額	293,000	313,746	△ 20,746	
事務手当	225,000	225,000	0						
通信運搬費	4,000	4,334	△ 334						
租税公課	380,000	380,300	△ 300						
委託料	49,000	48,720	280						
雑費	15,000	15,402	△ 402						
(2) 管理費支出	1,638,000	1,635,350	2,650						
事務手当	704,000	703,500	500						
会議費	167,000	159,148	7,852						
旅費交通費	124,000	123,920	80						
通信運搬費	128,000	129,256	△ 1,256						
消耗品費	77,000	81,418	△ 4,418						
印刷製本費	6,000	5,940	60						
委託料	161,000	160,588	412						
賃借料	249,000	249,256	△ 256						
負担金	15,000	15,000	0						
雑費	7,000	7,324	△ 324						

### 〈注記事項〉

- ・「予算現額」は、令和4年度第5回理事会（令和5年3月27日）で議決した収支補正予算後の額。
- ・II投資活動収支の部 1投資活動収入 特定預金取崩収入は、次のとおりである。  
「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金の内300,000円」を取り崩し、「I事業活動収支の部 2事業活動支出 事業費支出 文化振興事業 顕彰費に150,000円、贈呈式関係経費に150,000円」をそれぞれ充てたものである。  
「事業運営調整資金積立金取崩収入」は、「同積立金の内100,000円」を取り崩し、「I事業活動収支の部 2事業活動支出 事業費支出 文化振興事業 印刷製本費で会報等の刊行物発行経費」に充てたものである。
- ・II投資活動収支の部 2投資活動支出 特定預金繰入支出は、次のとおりである。  
「事業運営調整資金積立金繰入支出」は、将来の事業運営調整資金として200,000円を「同積立金」に積み立てたものである。  
「創立150年記念事業積立金繰入支出」は、函館文化会が創立150年を記念し行う事業の費用に充てることを目的として100,000円を「同積立金」に積み立てたものである。

# 一般社団法人 函館文化会 会員

(令和5年11月1日現在)

- (ア) 相原 秀 起隆  
青山 伸 江美  
東真 由 子  
安立 真 樹  
厚谷 享 博  
阿部 貴 義  
阿藤 義 廣
- (イ) 五百川 忠樹  
伊賀 嘉延  
池田 厚直  
池見 井 樹  
石井 田 彦  
石藤 葉 子  
伊稻 葉 治  
今泉 井 織
- (ウ) 上田 昌 昭  
梅田 誠 治
- (エ) 繪面 和 子
- (オ) 近江 茂 樹  
近田 幸 雄  
太江 誠 一  
岡崎 圭 子  
小笠原 金 哉  
小笠原 金 孝  
小笠原 金 愈  
小笠原 金 治  
沖野 熊 介  
小山 内 弘  
小落 合 子  
落合 原 治  
小原 山 男
- (カ) 貝森 子  
梶原 伴  
加藤 清 郎  
加金 榮 子  
金澤 俊 司  
金谷 美 也  
金山 正 智  
金叶 奈 敦  
蒲生 加 子  
川崎 研 子  
川見 順 春  
川野 良 明
- (キ) 貴田 福太郎  
木村 一 雄  
木村 拓 美  
木村 裕 俊
- (ク) 工藤 亜也子
- (コ) 荒幸 夢 形  
野幸 三 和  
小林 裕 明  
小辰 辰 肇  
小柳 幸 夫  
小今 千 尋
- (サ) 齊藤 修 三  
坂野 六 男  
坂本 本 子  
坂木 木 治  
佐々木 馨 茂  
佐々木 克 茂  
佐々木 俊 克  
佐佐木 志 郎  
佐藤 育 子  
佐藤 克 己  
佐藤 理 夫
- (シ) 里見 彦  
澤田 美 千  
(シ) 島津 昌 之  
島津 水 彰  
清城 光 朔  
新水 光 正
- (ス) 末永 玲 子  
菅野 剛 造  
鈴木 大 有  
須藤 田 司  
隅田 久 司  
雄
- (セ) 瀬尾 邦 靖  
仙石 智 義
- (タ) 平高 昭 世  
高高 達 也  
高島 昭 勇  
田村 郁 三  
島川 善 一  
刀川 和 夫  
館種 田 司  
田原 村 信  
田良 志 朗
- (チ) 近野 功
- (ツ) 辻喜 久  
土家 康 子  
坪山 元 宏  
富田 秀 彦  
田秀 嗣
- (ナ) 中尾 仁 彦  
中野 由 基  
中野 貴 晋  
中野 和 豊  
中野 拓 之  
中野 朝 也  
中野 村 山  
中野 村 寛  
中野 村 寛
- (ニ) 西澤 勝 郎  
西谷 文 子  
丹羽 秀 人
- (ネ) 根津 静 江  
根本 直 樹
- (ノ) 野口 博 敏  
野戸 崇 治  
野田 利 之  
野又 辰 肇  
野村 男 男
- (ハ) 橋田 恭 一
- (ヒ) 平野 利 明  
平川 康 宏  
廣川 真 由 美
- (フ) 福島 誠  
福原 井 方 至  
藤井 井 良 雄  
藤田 井 田 江  
藤内 内 光  
藤村 村 男  
筆村 矢 幸  
船村 野 幸  
古野 柳 太郎
- (ホ) 本田 光 正  
(マ) 増井 慎 吾  
益松 齊 子  
松崎 滿 洲  
松崎 水 夫  
松代 光 穂  
松村 谷 平  
松谷 藤 隆  
松丸 競 勇
- (ミ) 三浦 稔  
宮崎 昌  
宮脇 寛 生
- (ム) 向出 悦 子  
向方 清 治  
向棟 次 郎
- (モ) 毛利 悦 子
- (ヤ) 山田 民 夫  
山田 田 雄  
山田 田 涼  
山本 那 順  
山本 真 一
- (ヨ) 横山 佳 彦  
吉田 幸 二  
吉田 則 幸
- (ワ) 若柳 英 代  
若松 幸 幸  
若山 幸 弘  
渡利 正 直  
義

(以上160名)

## 編集後記

- ◇ 函館文化会会報「巴響」第85号をお届けします。編集作業が遅れ、お届けするのが1ヶ月ほど遅れてしまい会員皆さんはもとより、特に原稿を寄稿していただいた方には心よりお詫びを申し上げます。しかし、会報の編集は「会員に親しまれる会報」、「会員が参加する会報」を目指して取り組んでまいりました。これまで同様、読み応えのある会報になったと自負しておりますが、今後の編集のため、ご一読いただきましたらご意見・ご感想をお寄せください。
- ◇ コロナ禍での3年、不安と不便な状況の中でも多くの会員皆様に参加をいただきながら事業を開催してきましたが、この春の行動制限が緩和され若干ながら余裕を持って開催することが出来るようになりました。しかし、まだまだ安心できる状況にはないと思われまますので、今後も参加者の健康と安全を考慮し、また、事業内容にも工

- 夫を重ねながら開催してまいります。
- ◇ 今号の特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」のテーマは「亀田」。亀田市との合併50年を節目にと企画しましたが、6人の皆さんから投稿いただきました。合併にまつわる話や生まれ育ってきたまち、仕事で関わって来たことなど様々な観点から「亀田」へのお想いやエピソードを寄せていただき、特集の意義を満たしてもらえました。ありがとうございました。次回のテーマは「湯の川界限」です。さて、どんな話が聞けるか今から楽しみです。
- ◇ 特別寄稿として会員の古野柳太郎氏から投稿いただきました。ありがとうございました。三つの「常磐」、興味深く読ませていただきましたが、今後も、郷土の歴史や文化にまつわることや会員皆さんが取り組んでいることなどについての投稿をお待ちしております。
- ◇ 会報の印刷は、(有)三和印刷様です。(編集子)